

ストライクウィッチャー ズ～愛の夢～

プレリュード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここはどこで、これは誰の身体なんだろう？

知らない土地で、知らない戦争。そして知らない人たち。

わからない。なにもわからない。すべてが私の知らないことだらけ。

誰か教えて。ねえ、教えてよ。どうしてサニーヤ・V・リトヴヤクに私はなつている
の？

目

次

第1話	はじまり										
第2話	せんとう										
第3話	ちゅうさ										
第4話	そいね										
第5話	さいなん										
第6話	おふろ										
第7話	よしかちゃん										
第8話	ぴあの										
第9話	せいや										
第10話	ゆめ										
第11話	すおむす										
第12話	えいら										

119 109 99 89 78 64 55 46 35 26 14 1

第13話	さようなら										
第14話	ゆくえ										
第15話	かくご／カクゴ										
第16話	おすとまるく										
第17話	ジンリヨク／じんりょく										
第18話	さーにや										
第19話	わたし／ワタシ／私										
	166										
	188	176									
	157	147	138	129							

第1話 はじまり

私の父親は酒乱だつた。

1日中家にいて、私と母親に向かつて暴言を吐き、服で隠れる場所を選んで暴力をふるつた。

私の母親は不安定だつた。

常に父親に怯え続けている人だつた。そして父親がふるつた暴力の憂さ晴らしのため私を殴り、罵詈雑言を浴びせかけた。
それなのに。

それなのに私の中には幸せな思い出がある。

父親にピアノを教えて貰った。雨の日に退屈で雨粒が落ちる音を数えていた私のために歌を作ってくれた。一緒に連弾もした。少し厳しいところもあるけど、常に私のことを思つてくれていた。

母親に何度も甘えさせて貰った。幼い頃に母親の膝で私は眠り、母親は優しい手つきで私の髪を撫でてくれた。演奏会で帰りが遅い父親を待つために、暖炉の側でホットミルクを飲みながらずつと母親と語り合つた。

少なくともこの思い出は私のものではないはず。ならこの記憶は、この思い出は誰のものなんだろう。

そしてここはどこで、これは誰の身体なのだろう？

私は知らない。だがこの身体の主は知つてゐるようだつた。

ここはガリア前線基地。この身体の主の名前はサーニヤ・V・リトヴャク。ウイツチと呼ばれる軍人らしい。

すとらいかーゆにつと？ というものを足に装着し、魔法によつて空を飛び、ねうろい？ という人類の敵と戦う少女たちのことをウイツチと呼ぶらしい。

これは確実に私の知識ではない。なぜなら私には何のことかちんぷんかんぱんだからだ。

でも理解できる。

魔法なんてありえないものの存在も、その使い方もわかる。空の飛び方も自分の武器の使い方も。武器なんて握つたこともないのに、どうすれば当てられるかがわかる。

これは何？ どうして私はサーニヤという少女の体に入つている？

わからない。わからない。わからない。

ゆっくりと手を握る。開く。そしてまた握る。うん、感覚はある。

そこまで来て、私は寝転がつていて気づいた。毛布を退けて体を起こす。格好は……ブラとショーツだ。慌てて脇によけて置いた毛布で体を包む。いつもはパジャマのはずなのにどうして？

というかなぜなんだろう。自分の穿いているものはショーツのはずなのに、なぜかズボンだと認識している。

浮かんだ疑問は置いておくことにした。目線を落としていくと透き通るような白い肌へ。私の肌よりも白くて雪のようだ。とてもきれい。なによりアザがない。

手を胸に当てる。ここはあまり変わらない。大きくなれない運命なのだろうか。これが夢ならもう少し大きくしてくれてもいいのに。

ここで始めて隣にもうひとつ毛布のかたまりがあることに気づいた。ふくらんだ毛布からグレーの髪の毛がはみ出している。

私はこの人を知らない。けれどサーニャは知っているようだ。エイラ・イルマルタル・ユーティライネン……さん。サーニャとかなり親しい間柄のようだ。証拠に私は隣に人がいるのに警戒することなく、むしろ落ち着いてすらいる。

「どうしよう……」

起こすべきだろうか。でも気持ちよさそうに寝ているのに起こしたら気を悪くするんじや……。

「むにや……ううん……」

私が決めかねていてるうちにエイラが寝返りをうつ。そしてそのままベットから落ちてしまつた。

「ムギュッ！……つたたあ」

「だい、じょうぶ……？」

頭をさするエイラに声をかける。話すことは慣れてないけれど、そうしなければいけない気がした。

「ン……あれ、めずらしいな。サニヤがもう起きてるなんて」「あ……えっと……」

どうしよう。サニヤは朝が弱いらしい。私も決して強い方ではないけれどめずらしいとまで言われるあたり、よっぽどのようだ。

「め、目が覚めちゃって……」

「ああ！ そういうことってあるよなー」

けらけらと楽しそうにエイラが笑う。うまくごまかせたようだ。

……待つて。なんでごまかす必要があるの？ 正直の話した方がいいはず。エイラにとつてもサニヤにとつても。

「エイラ……」

「ンー、どうしたー？」

「じ、実は私は……ツ！」

私はサニヤじゃないんだよ。そう口にしようとした瞬間、頭に金釘でも打ち込まれたような鋭い痛みが走った。荒い吐息が漏れる。体がぶるぶると震えて、脂汗が背中を伝った。

「サーニャ？ だ、大丈夫か……？」

「う、うん……」
これはたぶん拒否反応みたいなものだ。私は誰かに自分がサーニヤではないと言つてはいけないのだろう。でも言わなきや。たかが頭が痛いだけ。痛いのには慣れつこだ。

「あのね、私はサーニ……うつ！」

「サーニヤ？ おい、サーニヤ！？」

全身に冷水を流されたようだ。そしていきなり頭痛はすっと引いた。

でもその代わりにやつてきたモノ。それはまるでこの世から私が消えていくような感覚。だんだんと存在自体が希薄になつていつて、この世界からサーニヤも私もいなくなつてしまふ。どうしてかはうまく説明できなければ、そんな空恐ろしい感覚だつた。

「サーニヤ？ なあサーニヤ？ 大丈夫なのか？ 医務室とか行つたほうがいいんじやないか？」

「う、うん……大丈夫よ」

おろおろと心配そうにエイラが私を見つめる。とにかく普通を取り繕おう。説明できないのに、気づかれたらいけない。

「でもすゞく苦しそうだつたぞ。やつぱり医務室に行こう」

「そう……？」

「そうだぞ。もしなにかあつたらいけないし、ちゃんと診てもらおう」

エイラが寝間着、というよりほとんど下着姿のままでいきなり立ち上がつた。びくつと反射的に身を縮ませてしまう。

「ほら、行くぞ」

「あ……」

抵抗する間もなく、いや抵抗するような気が起きなかつたと言つた方が正しい。ともかく立ち上がつたエイラが私の右手を取つて引っ張つていく。

この通路も見たことがないはずなのに、わかる。医務室への道のりも知らないはずなのに知つている。

わからぬことだらけだ。この世界のことも私がどうしてサーニヤの体に入つているのかも。どうして私はここが異世界で、自分がサーニヤの体に入つていると認識できているのか。

ただこの手に感じるエイラの手の温もりがこれは夢ではないと教えてくれていた。
「ついたぞ。ほら、ここでサーニヤは大人しくしくとくんだぞ。ミーナ中佐には私が言つとくから」

私に布団をかけるとエイラがドタバタと医務室を出て行つた。最後まで私をずっと心配そうに見つめ続けて。

布団から右手を出すと目の前に持つてきてから、握つたり閉じたりを繰り返す。他人に手を握られた。いつもなら抵抗したはずなのにそんな気も起きなかつた。

「……ふしぎ」

今まで感じたことのない感覚。それが右手にまだ残り続けていた。けれど決して嫌な感覚ではない。それだけは確かなものだ。

「サニーヤさん」

エイラと比べて静かに戸を開けて入つてきた赤い髪色の女性。どこか人を落ち着かせるような声色でその人は私の、正確にはサニーヤの名前を呼んだ。

やはりこの人も私は知らないはずなのに知つている。

「ミーナ隊長……」

この人が隊長なのかも私はもちろん知らない。けれどすつと隊長という言葉が口をついた。

この人がサニーヤの所属する部隊長さん。ふわりとした雰囲気でありながらも、ていねいなドアの開け方から窺えるきつちりとしたところも相まって、どこか大人びて見える女性だ。

「エイラさんに聞いたわ。体の調子は大丈夫?」

「え、えっと……はい。だいじょうぶ、です」

体を壊して倒れた訳じやないから、正直に言うと寝ている必要もない。けれど原因を言うことはできない。それを言つてしまふと私が消えるだけではなくて、サニニヤまで消えてしまう。

「そう……でも今日は大事を取つてゆつくり寝ていて。ナイトウイツチのシフトも今夜は外しておくから」

「あ、ありがとうございます……」

「事務報告だけになつてしまつてごめんなさいね。本当ならお見舞いの品でも持つてきたいところなんだけど……」

「いえ……気にしないでください」

目を伏せがちにしてミーナが謝る。そこまでしてくれなくともいいのに、とむしろ私が申し訳なく感じてしまう。

「じゃあ私は仕事に戻るわ。仕事が多くつて……」

「あ、えつと……がんばつてください」

「ありがとう。そうそう、これからみんなに伝えるんだけど、近いうちに坂本少佐が新しい子を連れてくるみたいよ?」

「新しい子、ですか……？」

「ええ。ミヤフジさん、だつたかしら。どんな子かしらね」

ぐぐつとミーナが背筋を伸ばす。もう時間らしい。部隊長ともなれば忙しい身なんだろう。それは私にはわからないことだ。私にそういつた経験はないのだから。「じゃあもう行くわね。サニーヤさんはゆっくり体を休めていてちようだい」

「はい」

ゆっくり休めと言われてもどうしようか。私の体自身にはなんら異常がない。このまま転がっているだけでいいのだろうか。

「本当にどうしよう……」

このまま私がサニーヤのふりをしていいわけがない。どこまでいつても私は私であってサニーヤではないのだから。そうは言つてもどうやつたらサニーヤが戻ってきてくれるのかがわからない。おそらくサニーヤが戻ってきてさえくれば私は元の体に戻れるのだろう。

だが続けようとした思考を医務室のドアを開け放つ音が遮つた。

「やつほー！」

ずいぶんと今日は来客が多い。そう思いながら私は医務室の入り口へと顔を向けた。短めの金髪が踊る陽気な少女がびよこびよこと跳ねるようにして医務室の中に入り、小

さなスツールに足を広げて行儀悪く座った。

「ハルトマンさん」

「やつほ、サーにyan。やー、ヒマだつたから來たよー」

「こ、こんにちは」

「寝すぎて寝れなくなつちやつてさー。ところで夕飯はなんだと思う?」

「え、えつとなんでしよう?」

「なんだろうねー。ま、いいや。ところでサーにyanもおひるね?」

「私は、ちよつと休むように言われて……」

「へえー、そつかあ。じゃあ私も休もうつと」

ハルトマンが私の布団の中に潜り込んでくる。なんというか自由奔放な人だ。会話のペースが掴めないというか、ひとりでまくし立ててくるような感じだ。

よくわからぬいけれど、この人はかなりフレンドリーなのかもしれない。私にはないもので私にできないことだ。

「あ、あの……」

でもそんなこと、今はどうでもいい。隣によく知らない人が寝ている。それだけで小さく体が震え始める。

人と接することが怖い。もしかしたら何かされるんじやないか。そんな予感に身が

竦む。

どうしようか。今すぐ逃げ出したいけれど、寝ているように言われたのにいなくなることはできない。

「またお前は！　いい加減にしろハルトマン！」

再びドアが荒々しく開かれると今度は髪を左右で結っている少女が医務室にドカドカと踏み込む。

「んあ……トウルーデ？」

「んあ、じゃない！　まつたくお前はいつもいつも！　それでもカールスラント軍人か！」

「うるさいなあ……」

「うるさいとはなんだ！　ああもう！　ほら訓練だ！　行くぞ！」

あうー、だのむぎゅー、だとよくわからないいうめき声をあげるハルトマンをバルクホルンが引きずつて行く。

「すまない。邪魔したな、サーニャ」

「あ、いえ……」

「普段から夜間哨戒をしてくれてることには助かっている。だから今日は私に任せて欲しい」

「すみません……」

「い、いや！ 別に責めているつもりはないんだ」

わたわたとバルクホルンが両手を振るとさつきまで掴まれていたハルトマンがベ
ちゃつと地面上に落ちてぐえつと潰れた声をあげる。

「ああっ！ グ、ええつと、とにかくゆっくり休んでくれ。じゃあな！」

来た時と同じように、まるで嵐のごとくバルクホルンとハルトマンのふたりが医務室
を去つて行く。私は医務室にぽつん、と取り残された。

なんと言ふべきか、騒がしい。こんなに楽しそうな騒がしさは初めての経験だ。私は
この世界についてわからないことだらけで、不安で仕方ない。でもひとつ、確實にわ
かつたことがある。

……本当に今日は来客が多い日。

第2話 せんとう

このガリア基地に来て、いやこの世界に来てから数日間たつた。今の所はサニーヤが戻つてくるような気配はない。そして私が元に戻るような様子も。

「う……うん」

今日も目が覚めて最初に視界に飛び込んで来たものは私の部屋の天井ではなくて、サニーヤの部屋の天井だつた。

包まつていた毛布を剥ぐとその下から滑らかな肢体とレースの下着が露わになる。

下着姿で寝ることには未だに抵抗があつた。けれど普段からサニーヤがそうしていのならばそれに従うしかない。いきなり寝巻きの類を購入すれば、疑いを持たれてしまうかもしれない。それに無断で必要ではないものにサニーヤのお金を使うことにも抵抗があつた。

「まだ慣れないな……」

下着姿で寝ることだけじやない。この世界のこといろいろだ。全てが私にとつては知らないことだらけ。多少は共通しているところもあつたけれど、魔法あたりのことはさっぱりだ。

緩慢な動きで起き上がると、まだ眠気の残る目を擦りながら服を着ていく。カーテンに遮られて日光は部屋に届かないが、もうお昼は過ぎているどころか夕方のはず。

「今日も夜間哨戒……」

ナイトウイッチ、と言つたように思う。つまり夜の見張り役のことらしいけれど、ネウロイと呼ばれる敵がいつ攻めてくるかわからない状況では仕方ないことなのだろう。

今のところは直にネウロイを見ずに済んでいる。けれど、おそらく時間の問題だ。それだけこの世界にネウロイは溢れているらしい。

「ん……しょつと」

身だしなみを整えて準備は完了。ミニスカートぐらいの丈のマントのような服は風通しが良過ぎて違和感がある。でもこれも慣れるしかない。

頭の中にある基地の地図にしたがつて移動。複雑な道を何度も曲がつてストライカーキュニットのある格納庫(ハンガ)を目指す。格納庫(ハンガ)に入るとストライカーキュニットを装着して隣から飛び出した武器であるフリーガーハマーを掴んだ。魔力を流すと頭から黒い猫耳が、そして同じように黒い猫のしっぽが腰あたりから生える。そしてすぐに魔道針がヴァン、と発現した。

《サーニヤさん。聞こえるかしら》

「あ、はい。クリア、です」

『いつも負担をかけてしまつてごめんなさい』

「いえ……大丈夫です、ミーナ隊長」

フリーガーハマーを肩を支点にして担ぐように持つ。魔法の使い方なんてものは私が当然、知るわけもなかつた。だけどなんとなく使い方はわかつた。サーニヤの体に染み付いた動きというもののなのかもしれない。事実、ストライカーユニットの装着もなんの滯りもなくできている。

「行つてきます」

『お願ひね』

ストライカーホロペラが唸りを上げる。体の中にあるチカラのようなものがストライカーホロペラに吸い込まれていく感覚と一緒にふわりと体が浮き上がる。

『501JFW Litvyak, wind 015, degrees at
7 knots. Cleared for take off.』

「了解。アレクサン德拉・ウラジミーロヴナ・リトヴァク、出ます」

一瞬、慣性力。すぐにどんな力が働いたのかわからないが、体にかかる抵抗が薄れる。そのまま加速。滑走路を駆け抜けて背筋をぐぐつとのばす。浮遊感。そして私の体が大きく空へと飛び上がつた。

空。夜の空。真っ暗で飲み込まれそうな黒い空に光源と言えるようなものは月と星

明かりのみ。

しつかりと見ることはできない。視界は最悪だ。けれどこれが魔法の力なんかかもしれない。見えなくともわかる。周囲はクリア。何か魔導波を遮るようなものはない。

この魔導波というのも魔法の力らしい。魔法というものはひとりでレーダーの代わりもできてしまう。なんとも優れものだと思う。どういう原理なのかはいまいち掴めないままだけれど、感覚的に使うことができるため問題なしとすることにした。

「らー、ららー」

わからないことだらけ。けれど空を飛ぶことは意外に楽しかった。思わず歌を口ずさんでしまうくらいには。いつもなら恥ずかしくてできないことも、誰も聞いていないのなら簡単だった。

この歌を私は知らない。でもなんとなく口ずさんでいた。サニーヤのお気に入りなのかもしねれない。

「異常はなさそう……」

夜間哨戒とは基地に接近するネウロイを見張ればいいらしい。そして私はナイトウイツチと呼ばれている夜間哨戒を主とするウイツチ。

「ん……」

空中でくるりと回つてみる。夜風が髪を撫でた。誰もいない空をひとりで飛ぶ。こ

の時だけは私がサーニャを演じる必要はない。

初めて飛んだ時は不安だった。どうすればいいのか右も左も分からぬ。だからいきなり夜に飛べと言われた時はどうしたものかと本気で悩んだ。ただでさえ未経験のことを視界の悪い夜に。はつきり言つて墜落するんじやないかとさえ思つていた。

でも飛べた。

巡回ルートも聞いていないのにわかつた。空の飛び方も、ストライカーユニットの使い方さえも。

「知らない。私は知らない。けれどサーニャが知っている」

小さく呟く。誰もいない空では答えなんて望むべきもなかつた。

結局のところ、いまいちピンと来ないことが多すぎる。サーニャの記憶すらもあてにはならない。時と場合によつてわかつたりわからなかつたりが激しすぎるのだ。普段から他人とどう接しているかなどはまったくわからない。でも、魔法の使い方やストライカーユニットの使用などはわかる。

「つ！」

そしていま感じた魔導波の遮られるような感覚も知つているものだ。

背筋がぞくりと粟立つ。けれど、思ったより冷静だ。はじめて遭遇したらもつと取り乱すかと思っていた。

「報告。雲の中にネウロイがいます」

『……数は?』

落ち着いたミーナ隊長の声。報告は迅速に。そして正確に。高ぶる心臓を抑えて報告を紡ぐ。

「数は1。中型のタイプF。まだ気づかれてません」

『進路は?』

「2—5から2—8、です」

『すぐに救援を送るわ。それまで……』

「ごめんなさい。気づかれました」

一条の紅い光線が空間に噛みつく。幸いなことにかなり外れた場所に飛んでいったおかげで、回避行動はとらずにすんだ。

攻撃を受けた。当たつたら死んでしまってもおかしくない。でも私は戦わなくてはいけない。でも私なんかに……

だめ。今はこんなことを悠長に考えている余裕はない。

「戦闘に入ります」

『……わかつたわ。でも無茶はしないで。すぐに誰かを送るから』

「はい」

重いフリーガーハマーを担ぎ直して雲をじつと見つめる。雲の中では視認することは難しい。どこにネウロイがいるかなんてまつたく見当もつかない。

けれど私にはサニヤの魔法がある。

見ることができなくたってわかる。正確な位置からどんな形なのか細部まではつきりと。

フリーガーハマーを撃つことなんてない。だけどサニヤが撃てるのなら、サニヤが当たられるのならできる。根拠のないことではある。けれど戦闘なのに私は落ちている。私は経験したことのないはずなのに、どうすればいいのかなんとなくわかつている。

体を大きく捻る。左にロール。抵抗で体がばらばらになりそうだ。ぐつところえて飛び続ける。さつきまでいた場所にビームが飛来した。

「こないで……」

背中を反る。ピッチャアップ。ぐんぐんと高度をあげる。またいくつもビームが飛んでくる。ある程度はかろうじて避けられた。けれど、数が多くすぎた。

「あつ……」

直撃する。だめ。私のせいでサニヤを死なせるようなことだけは……

その時、体に魔力が循環した。黒猫の耳がぴょこっと動く。

シールド展開。かわしきれなかつたビームを防ぐ。ビームがシールドにぶつかつた衝撃で後ろに押しやられそうになる。

「んっ……」

シールドの展開方法は知らなかつた。けれど咄嗟に体が動いた。まるでまつ毛に触れた時に目をつぶつてしまう反射のような感覚。

あぶなかつた。これは私の体ではなく、サニヤの体だ。どういう原因で私がサニヤの体に入っているのかわからぬが、間借りしている身として傷つけてはいけない。

シールドがビームとぶつかり合い、じりじりと後ろに押されていく。ぶつかる度に体中の魔力がごつそりと持つていかかるようだ。

このままだといずれ魔力が尽きる。そう察するのにあまり時間はかからなかつた。ストライカーの出力上昇。ビームを弾いて天に向かつて飛ぶ。ぐんぐんと高度を上げていけば、高高度からネウロイを見下ろす形になる。

「……捉えた」

フリーガーハマーの狙いをつける。トリガーを引き絞つた。白煙の尾を引きながら3発のロケット弾のようなものが飛び出していく。

当たる瞬間を見届けずにロール。ピッチダウンして加速。背面飛行で縦方向にター

ン。

無理な機動をすればするほど、体に負荷がかかった。だが、ビームが直撃することと比べればダメージとしては軽い。
と、強がつてはみた。でも、実際に私がストライカーを装着して戦闘をするのはこれがはじめてだ。

きっとサニヤなら大丈夫だった。この負荷からくる痛みにも慣れているんだろう。
けど今、戦っているのはサニヤの体を借りた私だ。ついこの前まで戦闘とは無縁だった私には、この痛みだけでかなりの苦痛だった。

「つあう…………」

痛みなんて慣れっこだと思つていた。でもこれは今まで経験のある痛み——ぶたれるなど——とは別種のものだつた。

痛みが走るたびに、ぎゅつと体がこわばる。小さなうめき声が口からもれることを意識してしまう。せつかくあげたストライカーの出力が落ちていくが、それを元に戻す余裕すらない。

体中のそこかしこが悲鳴をあげている。もう嫌だ。なんで私ばかりこんな目に

弱音ばかりが頭をめぐる。もうここで終わつたつていいじゃないか。胸をよぎつた

……

言葉をかぶりを振つて打ち消す。

痛い。痛いよ。もう諦めてしまいそなへくらい。

でも。それでも———

「お願い……飛んでつ」

それでも私はここをサニーヤの死に場所にしたくない。

氣力と魔力を振り絞る。ネウロイの真下にあたるところを駆け抜けながら続けざまにもう3発。雲が吹き飛ばされ、当たった場所からは白い欠片が振り撒かれる。

「見つけた」

吹き飛ばされた雲の向こう側に、どこか不気味さを漂わせる赤い宝石のようなものが露出した。あれがコア。あれを破壊さえすればネウロイは倒せる。

今度は真横にロールしてターン。再びネウロイの真下に。飛び交うビームの隙間を縫うように飛び、避けきれないものはシールドで受け止める。

「これで……」

露出したコア。逃すわけにはいかない。雲の中に再び隠れようと/or>ネウロイを魔導波で捉え直す。

そして魔導波で捉え続いているのなら、どこに晒されたコアがあるかはわかる。位置が特定できたのなら、あとは当てるだけ。

狙いをつける。人差し指をためらいなく引ききつた。フリー・ガーハマーに残る口
ケット弾、3発がすべて飛び出す。

爆炎。直後にネウロイが震えて、その姿を破片へと変えた。

「終わつ、た……？」

どうしても疑問形になつてしまふ。けれど倒せたようだ。ここまで破片になつてバラバラなら、きっと倒すことができたはず。それに魔導波に反応がない。周囲には魔導波をはね返すものはなくなつていた。

「ミーナ隊長、ネウロイを撃破しました」

《サニニヤさんは大丈夫?》

「はい。これから帰投します」

《わかつたわ。途中でバルクホルン大尉と合流して。進路は……》

「だいじょうぶです。今、見つけました」

見つけた、と言つても魔導波で接近する飛行物体を捉えただけだ。けれど、ネウロイと比べて明らかに大きさが違う。たぶんこれがバルクホルン大尉だ。

《そう。じやあ氣をつけて》

「はい」

通信が終わつてからふう、と詰めていた息を吐き出した。そしてようやく私の手が震

えていたことに気づく。

初めて戦った。武器なんて生まれてから握ったことなんてなかつた。だから、というべきなんだろう。

必死すぎて感覚がついさつきまで追いついていなかつた。けれど、落ち着いた今だからこそ言える。

——私は、怖かつたんだ。

震える手で体をかき抱く。震えは体にも伝播していつた。もしかしたら初めてサニヤが戦つた時もこんな感じだつたのだろうか。

向こうからバルクホルン大尉が飛んでくる。落ち着け。落ち着くんだ私。吸つて、吐いて、吸つて、吐いて。とにかく震えだけでも止めなくては。ここから先、また私はサニヤになりきらなくちやいけないのだから。

第3話 ちゅうさ

出撃が終わったあとには、必ずやらなくてはいけないことがある。それは夜間哨戒だろうと、通常時の迎撃だとしても、絶対にやらなくてはいけないこと。

それは報告だ。

元の世界でも『ホウレンソウ』を大事にしなくてはいけない、と言われたことはある。もちろん、食用野菜のことじやなくて、『報告・連絡・相談』の略のほうで。

だから私が基地に帰ってきて真っ先にやらなくちゃいけないことはミーナ中佐への報告だつた。

「失礼します」

控えめなノック。なんだかとても立派な立て付けのドアは響く音も重厚感がある気がする。

「入つて」

よく通るミーナ中佐の声がしてから、ドアを開ける。でも部屋の中はミーナ中佐だけじゃなくて、坂本少佐もいた。この人とはあまり接触かない。よくミーナ中佐といつしょにいるところを見るけれど、やっぱり難しい話をしているんだろうか。

どのみち私にはあまり関係ない話だし、関係を広げることはバレるきっかけになりかない。それに、サニーヤが戻ってきた時に違和感を与えるような結果にもなりかねない。

「おお、サニーヤ。報告か?」

「はい。ミーナ中佐、哨戒任務は完了しました。異常は特に見られません。哨戒中にネウロイと接触することもありませんでした」

「そう、わかつたわ。いつもごめんなさいね」

「そんなことはないです」

ならナイトウイッチの数を増やしてくれてもいいのにと思つたけど、軍の詳しい事情を私は知らないから黙つておこう。余計なことを言つてボロを出してしまつては、なんの意味もない。

「報告ありがとうございます。ゆっくり休んでちょうどいい」

「はい。失礼しました」

廊下に出てから張り詰めていたものを緩めた。すでになんども報告はしてきたけれど、やつぱりこの時間は緊張する。それ以前に私は人と長い時間、話すことが苦手という理由もあるけど。

私は昔から内気な性格だつたと思う。だからこそと言うべきかもしれないけれど、と

にかく私は人と話すことがそんなに得意ではなかつた。今でこそだいぶ改善されたけれど、以前は話すことすら拒絶していた。今になつて考えると、親に暴力を振るわれていたことにも、原因があつたのかもしれない。

「ふわあ……」

あくびを出した口を手でおおう。はやく部屋に戻つてベットに潜り込みたい。だから急いで部屋に向かつた。

宍

「ふう……」

「ずいぶんと疲れてるな、ミーナ」

「そう見える？」

「ああ」

きつぱりと坂本美緒少佐に言い切られて、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐は肩をすくめた。実際に疲れていないと言えば嘘になる。部隊長という立場は責任も重

い。それだけではなく、全体を見て動かなくてはいけない。出撃が減りはしたけれど、やらなくてはいけないことはむしろ増えた気がする。そしてその分、気疲れもしやすくなっている。

美緒はそういうところが本当に鋭いと思う。だからこそ、つい現場指揮などをまかせがちになつてしまふのだけれど。

「大丈夫よ。これくらいは平氣だから」

「そうか。ならないんだが」

「で？ わざわざこんな時間に私の仕事部屋に来たからにはなにかあるんでしょう？」

なにもないなら、たいてい誰かの訓練を見ているか、自主鍛錬をしているのが坂本少佐という人だ。^{ウイッチ}つまりミーナの部屋に来たからには何かしらの理由があるはずだつた。「なに、大したことじやない。ただ、最近の部隊の様子を知るならミーナに聞いた方が早いだろう？」

「そうね……宮藤さんが来てから少し乱れはあつたけど、全体的に見るなら今はだいぶ落ち着いたかしら」

あごに手を当ててミーナが眉をひそめた思案顔をする。様になつていてる姿ではあるが、それでもミーナは一八歳のうら若き乙女。決して疲れた中間管理職のようだなどと言つてはいけない。

「バルクホルンもか」

「ええ。トゥルーデもいろいろ思うところがあつたんじやないかしら」

たぶん妹のクリスを重ねてしまつたのだろうと察しはつけていたが、ここで口にする必要をミーナは感じなかつた。それにこれは、かなりプライバシーに踏み込む内容だ。推測が当たつている確証がミーナにあるわけでもなし、そして話さなくてはならない状況でもない。

「ペリースも調子を取り戻し始めた。リーネに至つては実戦において**撃墜**^{スコア}をあげた。一時の混乱はあつたが、結果的に見れば宮藤の参加はいい効果をもたらしたんじやないか？」

「まあ、そうね。それに彼女にしてもだんだん戦力になつてきているし、いいことだけは思うわ」

「思われせぶりな言い方だな」

「そうかしら？」

とは言え、引っかかるものが何もない訳でもない。意図せずしてそんな言い方になつてしまつたのかもしれないとしたら、悪いことをしたと思う。

「ミーナ、何が気にかかつていてる？」

「サーニャさんのことよ」

「サニニヤが？ 今しがた報告を聞いたところだが、特に変な様子は見受けられなかつたぞ？」

「これを見て。つい先日、夜間哨戒中に起きた戦闘のログよ」

ミーナが差し出したのはサニニヤが単独で夜間の哨戒中にネウロイと交戦した記録が記された書類。サニニヤのストライカーに搭載されている計器とレーダーの記録を解析すれば、サニニヤがネウロイとどう戦つたかわかるのだ。

「ふむ……」

「どう思うかしら？」

「はつきり言つてサニニヤらしくないな。動きに精細を欠いている。サニニヤの腕があればこの程度ならすぐに落とせるはずだ。それなのに手こずりすぎている」

「やつぱりそうよね。これ、ちょうど宮藤さんが来た時くらいからなのよ」

「宮藤が影響していると？」

「トゥルーデのこともあるから……」

「だがサニニヤはナイトウイツチだ。宮藤とは話したことすらほとんどないんじやないか？」

「それはそうなんだけど……でもトゥルーデだって深く関わつたりはしていなかつたわ」

「む、それはそうだな」

そして例はこれだけではない。ひとつひとつの哨戒行動において、サーニヤの動きは鈍くなっている。大きく影響が出ているわけではないが、部隊長としてミーナは見逃すわけにはいかない。何かがあつてからでは遅いのだから。

「どうする、バルクホルンの時みたいに組ませてみるか？　すぐにとは言わないが」

「そうね……そうしてみようかしら。宮藤さんはできそう？」

ミーナが訪ねたのは、宮藤に夜間哨戒をさせることは可能か、ということだ。夜間飛行をするというのは、昼に飛ぶことと比べておそらく難易度が高い。彼女とサーニヤだけで行かせて問題ないか、ということを暗にミーナは教官を務めている坂本少佐に聞いていた。

「わからん。私がつこうか？」

「……そうね。美緒がついているなら安心できるわ。お願ひしていいかしら？」

「任せろ」

坂本少佐が言い切った。それならばミーナも安心できる。階級はミーナの方が上ではあるが、年齢は坂本少佐の方が上なのだ。

「なら近いうちに夜間哨戒のシフトを組み直すわ」

「頼む」

また仕事が増えた、と内心でため息。でもこれは必要なことだ。だからシフトの組み直しだつて止む無いことなのだ。少しばかり負担が増えるだけで部隊の問題が解決できるならいいことではないか。

ついつい愚痴のようになってしまった思考をミーナは首を横に振って追い払った。

「では私もそろそろ寝るとしよう」

「そう。おやすみなさい」

「ああ」

ひとりきりになつた部屋でミーナが一息をついた。レーダーの記録に残つたサニヤの動きがミーナの胸にはしごりのように残り続けている。

「宮藤さんと組ませることで好転するといいけれど……」

いくらバルクホルンの一件では成功したからといって、次も同じ手で上手くいくとはかぎらない。これで、貴重なナイトウイツチの戦力が減つてしまふことはミーナとしてはなんとしても避けたい事態だった。

世界的にみても、ナイトウイツチは貴重だ。そして501に専門として夜間に動けるのはサニヤだけ。一応としてバルクホルンやエイラなど夜間飛行もできるウイツチを交代要員にしてはいるが、本職のナイトウイツチであるサニヤがきちんと機能した方がいいに決まっている。

だからミーナとしてはサーニャが不調という事態は、エースであるバルクホルンが不調であるということとイコールで早急に解決したい問題だった。

「ただ美緒の言い方からするともう少し時期を見た方がいいかしらね……」

急いだ方がいいことではあるが、事を急ぎすぎたせいで誰かが傷つくような結果になつてはいけない。何より宮藤はまだ新人だ。慎重に慎重を重ねるに越したことはない。

「しかも近いうちに本部への報告で呼び出し……本当に勘弁してほしいわ」

どちらかというとミーナとしては報告のために呼び出される方が憂鬱だった。どうせまた口クでもないことを言われるに決まっている。戦果は十分すぎるくらいに出しているし、基地防衛もしっかりとできているのだから、これ以上に口を出すのはやめてほしいものだ。

そしてここまでいろいろなことが積み重なれば、ミーナのため息が増えるのも必然だつた。

第4話 そいね

そろそろこの世界に来てからどれくらい経つたかカウントすることも億劫になつてきた。いつまで経つても私が帰られるような様子はない。

「ねむい……」

ついには夜間哨戒もだんだんと慣れてきた。帰つてきた後の眠気に抗うのは難しいけれど、それでも少しは前よりもちゃんとできるようになったと思う。

途中でばつたりと倒れてしまわないよう、睡魔と戦いながら廊下を歩く。サーニヤもこんな生活を続けていたのだろうか。だとしたら昼夜が逆転していたことにも納得だつた。というか、私が元に戻つても体内時計は狂つたままなんだろうか。

それについても今日はずいぶんと哨戒に時間がかかるつてしまつた。だんだん慣れてきたとはいつても、そこはついこの間まで戦いとは関係のなかつた私だ。少しは多めに見てもらつてもいいと思う。

「……ニヤが……………んだ」

「でも……んじや…………ですか？」

何か話し声が聞こえる。それに、たぶんだけれどサーニヤの名前が聞こえた気がし

た。

もしかして何か私が気づかないところで変なことをしたせいで、サニーヤがいじめにあつたりしてしまったんじゃ……。もし私のせいでサニーヤが戻った後にひどい目に合わされたりするのは避けたい。

こつそりと足音を忍ばせて廊下の角に。向こう側から見つからないように、慎重に耳をそば立てた。

「いいじやないですか。エイラさんのベットにサニーヤちゃんが寝ぼけて来ることもなくなつて、ちゃんと自分の部屋で寝ているのなら」

「でもなー、リーネ。サニーヤはいつも来てたんだぞ？　……もしかして私はサニーヤに嫌われたんじや……」

「そ、そんなことないですよ！　ほら、サニーヤちゃんと夜間哨戒をよくしてるじやないですか。嫌いな相手ならばつきり言いますよ！」

「でもサニーヤは……はあ」

「え、エイラさん!?」

「はつきり言うタイプじゃないからなー、サニーヤは」

「それはそうかもしれないけど……でも絶対に大丈夫ですっ！」

.....。

ともかくいつたんその場を離れる。気づかれないようになつそり、こつそりと。
なんとか部屋に戻つてボフツとベットに倒れこむ。体を包む疲労感。すぐまどろみ
に身を委ねたいところだけれど、今はそれどころじゃない。

サニーヤはよくエイラのベットで寝ていた。寝ぼけて部屋を間違えていたようだ。
思い返せば私がサニーヤの中に入つたあの時、私はエイラの部屋で寝ていた。
つまり、サニーヤはしそつちゆう寝ぼけてエイラの部屋で寝ていた。

でも私はあれ以来、一度もエイラの部屋に行つていない。もちろん、エイラのベット
で寝ることもしていない。

そしてそれが仇となつた。まさか他人のベットに潜り込むなんてことをいつもして
いるとは思つていなかつたけれど、どうやらこの認識は間違つていたみたいだ。
けれど幸いなことに、この問題は解決することができる。

私がエイラの部屋に寝ぼけたふりをして突入し、そのままエイラのベットで寝てしま
えばいい。

問題点をあげるのなら、私が下着姿で寝なくてはいけないこと。ひとりだからと自分
に言い訳してなんとかここまで下着姿で寝てきたけれど、隣に人が寝ているとなると、
私が持つかどうか。

もしかして、あっちの父親や母親のように寝てている時でさえ、暴力を振るわれるんじゃないかな。父親の友人と名乗る男たちに暴行されるのかもしれない。そんなことはもうありえないわかつていても、刻みつけられた記憶が体の震えやめまい、吐き気、ひどい時は呼吸困難という形になつてしまふ。

事実として、ハルトマンさんが医務室で私の横に転がつた時に私は症状が出ていた。それでなく、この前は水着一一套なぜか黒のビキニだつた一一套を着させられて浜辺に行つた時は、肌を露出しすぎたせいかめまいがして、日射病と勘違いしたエイラによつて基地に戻されたりしていた。

だからといってこの問題を無視し続けることはできない。

前にエイラの部屋で頭痛がした時といい、エイラは私の体調に異変があると気づけばすぐに行動している。つまりエイラの行動力、洞察力は並大抵ではない。今の段階でもつとも私がサニーヤではないと気づく可能性が高いのはエイラだ。

それは……なんというかとても言いづらい話になるけれど、隠し通すために、私はエイラと同じベットで寝るしかないということだ。

下手に私がサニーヤと違う行動をすれば疑われる。そして正体に気づかれたら確実に私は問い合わせられる。そうなつたらおしまいだ。私がサニーヤの体に入つていることを口にしたら最後、私もろともサニーヤの存在がこの世界から消えてしまう。

私のせいでサーニヤが消えてしまうことは避けなくてはいけない。それは私の果たすべき責務だ。

なら、私のやらなくていけないことは決まっている。でも明日から、明日からにしょう。もう眠気が限界だつた。

だから今日はもう、おやすみなさい。

そして今夜も夜間哨戒。

「はあ……」

この世界に来てからといふものの、ため息の数が増えている気がする。でも仕方ないことだと思う。

明け方の空に少しずつ太陽が顔を出し始めていた。眠気はもちろんある。でも今日に関してはそんな強敵である眠気に圧勝している要素のおかげで、すぐに寝落ちしてしまうことはなさそうだ。

まだ基地に着くまで距離がある。いつもなら、ふかふかのベットが待っていると思うと基地に着くことが待ち遠しかったけれど、今日はちがう。

どれだけ気の進まないことだつて避けて通れないものもある。いやだですべてがまかり通る世の中じやないことくらいは、私もとつぶくに悟つている。
だからはつきりと言葉にしてしまおう。

私は今日、エイラと寝る。

…………なんだかとつても誤解を招きそうなので、念のため言つておくと、いつしょのベットで寝るだけだ。そう、それだけ。

ストライカーユニットを所定の位置に収めると、収納に押し嵌めたフリーガーハマーカから手を離す。装着していたストライカーから足を抜いてトン、と床に足をつけた。ひんやりとした感触が足の裏に伝わる。

報告を終えて、いつものように廊下を歩く。でもサーニャの部屋には戻らない。いや、正しく言うなら戻れない。
「もうついた……」

まさかもう着いてしまうなんて思わなかつた。いつもと同じペースで歩いているは

ずなのに、まさかここまで早くエイラの部屋まで来てしまっては。

ドアの前まで着いたのに、ドアノブに手が伸びない。でも廊下でずっと立っているのも不自然すぎる。

2、3度ほど深呼吸。いい加減に覚悟を決めるんだ、私。

軋まないようすにエイラの部屋のドアを開ける。それからこつそりと中に忍び込んだ。お願いだからエイラが起きませんように。

スヤスヤとエイラが寝息を立てて眠っている。ゆっくりとベットに近づきながら、ネクタイを外した。次にマントと一体型になつていてる上着のボタンを外して胸元をはだける。そのままするりと脱ぎ捨てた。そして最後に残つた黒のストッキングも脱いでしまえば、私が身にまとつているものはブラとショーツ、いやズボンのみだ。

「うう……」

恥ずかしい。いくら同性とは言つても、下着姿はハードルが高すぎる。水着も限界ギリギリだったのに、それよりもハードだ。

一歩、二歩とベットに向かつて歩みを進める。もしかしたら、今まで生きた人生の中で一番、気が張つていた時間だつたかもしれない。

そして気を張りすぎたことがアダとなつてしまつた。

「あうっ」

自らが脱いだストッキングに引っかかって足がもつれた。そしてバランスを崩した私の身体はエイラのベットへと倒れ込んでいく。

待つて。せつかく音を立てないように気をつけて部屋に入ったのに、これじや意味が……

そんな私の祈りは通じなかつた。無情にも私の身体はエイラのすぐ横にドサツと音を立てて倒れ込んだ。

「うわあつ！」

ああ、そしてエイラの目が覚めてしまつた。仕方ない、けれどこうなつたらもう打つ手はひとつ。

私はベットに倒れると同時に寝落ちした。そうやつてごまかすしかない。

「サ、サーニャ!?」

「……」

目を細くしてベットにうつ伏せで転がり続ける。寝たふり、寝たふり。

「ハア……今日、だけだかんなー」

口元をちょっと緩ませてエイラが起き上がる。それから隣の毛布に手を伸ばしたところまで見て、そつと目を閉じた。

「これでいいか」

目をつぶっているからわからないけれど、たぶん毛布が私にかけられた。

「あー、もう。まつたく……」

トン、とベットから飛び下りたらしい足音。こつそりと首だけ動かして、目を薄く開けた。

私の視線の先でエイラが私が脱いだ服をざつくりと畳んでまとめてくれていた。
「ホントに……今日だけだからなー」

ちゃんとまとめておけばよかつたと少し後悔。いつもなら畳んでおくのに、今日に限つて意識を寝ることに持つていかれすぎてすっかり忘れていた。かあつと頬に熱が集まる感覚に、今すぐ両手で顔を覆いたい衝動に駆られる。

「ふわあーあ。おやすみ、サニニヤ……」

ベットにエイラが寝転がった振動が伝わる。そしてすぐに寝息を立てて寝てしまつた。

まさか最後につまづいてしまうなんて思わなかつた。でもうまくいつたから結果オーライということにしておこう。

それについても、前に寝たことがあるけどエイラのベットはけつこう大きい気がする。それだけじやなくてふかふかだし、いい匂いもする。いい柔軟剤をつかっているのかもしない。

夜間哨戒の疲れが出てきたのか、眠たくなってきた。でも、エイラのベットでもう転がつているわけだし、やるべき課題は達成している。なら、このまま寝てしまつたつて……

寝てしまえている？

驚いてベットからはね起きないようにシーツを握る。毛布が震えたけれど、エイラが起きる様子はない。

隣に人が寝ている。しかも私は下着姿。それなのに息の乱れすらない。私は落ち着いてベットに転がつていられている。

どうして？ なんで私はこんなに落ち着いていられるの？

考えられるのは、サニーヤの影響が出ているからかもしれない。サニーヤはエイラの部屋にしょっちゅう寝ぼけて突入していたということは、ほかの人よりも心を許していたはず。それが私にも影響しているなら、この状況にも納得がいく。

でも、これは私としてはすこぶるいい状態だ。これでエイラの隣で寝ている時も、常に症状が出るかもしれないと怯える必要はない。

そして、これでエイラに疑われるかもしれない要素をひとつ減らせる。しかも私が安眠できるのなら、それに越した事はない。

どうして症状が出ないか、ちゃんとした理由がわかつたわけじゃない。でも今はこれ

でいいと思う。それにもう考えはまとまらない。
エイラのベットは寝心地がよかつた。だからすぐに私は眠りに落ちてしまった。

第5話 さいなん

月明かりが今晚は明るい。新月の夜は飛びづらかったことを考へると、月明かりがあるだけでだいぶ助かる。

私でいられる貴重な時間。それはけつこう大事な時間だ。それにこの広い空を飛んでいるだけで気も紛れる。

「ら、ららー。ららー、ららら」

慣れた歌を口ずさむ。よく知らない歌だけど、つい口について歌つている歌。おそらく、サーニヤがよく歌つっていた歌なんだと思う。私としても苦手なテンポでもないし、音楽は嫌いじやないから、誰もいらないなら歌うことに抵抗はなかつた。

「んつ……」

魔導波に反応。近くを飛んでいる何かがいる。歌を中断して接近。すぐにプロペラを回して飛ぶ飛行機の姿が視界に入つた。

そういえば、今日はミーナ中佐と坂本さん、それから宮藤さんが軍本部に行つている日だった。じゃあこれは帰りの飛行機のはず。
《サーニヤ、出迎えすまないな》

「いえ。みなさん、おかえりなさい」

《綺麗な歌だつたわ。ありがとう》

「い、いえ……」

かあつと頬が熱くなる。まさか聞こえていたなんて。どうやらこの魔導波、私の声を乗せて発信することもできるらしい。最近になつてラジオが聞けることを見つけて楽しんでいたのに、こんな弊害があつたなんて。今度から気をつけよう。無線に声が乗つているのなら、ひとつ間違えれば私の歌声が世界にラジオ放送されるという事態が発生しかねない。そんなことが起きたら、部屋に引きこもつてしばらく出てこないようになる自信がある。

《すゞーい！ サーニャちゃんつて本当に歌が上手なんだね》

「ん……」

だから触れないで欲しい。お願ひだから。誰かに聞かれてるなんて思つてなかつた。そうだと思つていたから歌つていた。あれはお出迎えの歌なんかじやなくて、ただの私の気晴らしだつたのに。

プロペラ機に並走、この場合は並飛？ とにかく横に飛んでいたその時、私の黒猫の耳がピクツと反応した。

「あ。これつて……」

『どうした、サーニャ』

「ネウロイがいます」

『なんだと?』

坂本少佐の声が剣呑さを帯びた。私の頭部に展開している魔導針が常時の緑色から、非常時のピンク色へと変わっていた。

『……私の魔眼では捉えられないが』

「雲の中です」

坂本少佐の魔眼では捉えられないかも知れないけれど、私の魔導波なら捉えることができる。坂本少佐の魔眼はコアを補足することに関しては私より上手で、私の方がネウロイそのものを捉えることは得意だ。

『サーニャさん、倒さなくともいいわ。プロペラ機から引き離して』

「了解。誘引します」

プロペラ機には戦闘能力はない。けれど3人も優秀なウイッチが搭乗している。落とすわけにはいかない。けれど倒しきれるかわからない。だからこそ、ミーナ隊長の命令は誘引なんだろう。

ストライカーの出力を上昇させてプロペラ機から離れる。真下に広がる雲海を見下ろして、魔導波だけを頼りにネウロイの大まかな位置を把握する。

引き金を連続で引き絞つた。まだ慣れない反動が体を這い回って、歯を食いしばる。

3発のロケット弾。それぞれが雲海の雲を吹き飛ばしてぽつかりと穴を空ける。

「これは……なに?」

なにかが聞こえる。引つ搔くような音が一律のリズムを刻んでいるのだ。

このリズム、どこかで聞いたことがあるような……。私の記憶ではない、サーニャの記憶がそう囁いてくる。

だめ。気を取られている場合じゃない。彼女たちを守らなくちゃいけないのだから、細かなことに気を取られている余裕なんてない。

でも私の集中を乱してくるこの音はなんだろう?

もう一度、発砲。また外れた。今度もぱつかりと穴を空けただけに止まっていた。

「プロペラ機は……」

魔導波でプロペラ機を捉え直す。だいぶ離れたところに逃げてくれたようだ。でも、まだ油断はできない。安泰とはとても言えないのなら、もう少し引き付ける必要がある。

「……攻撃してこない?」

果たして本当にネウロイなんだろうか。さつきからビームの1本も飛んでこない。シールドの展開を準備していたのに、その機会がまつたくこない。

でも、魔導波が返してくる情報はサイズ、速度、その他の情報をすべてをとつてもネウロイだ。けれどネウロイが一方的に攻撃され続けているなんてことがありえるんだろうか。私はまだネウロイとの戦闘経験が多いわけではないけど、現状で遭遇してきたネウロイはすべて攻撃してきた。それなのに今回に限つてまつたく攻撃してこないなんてことが……

《サニーヤさん、もう十分よ。ありがとう》

「……はい」

ストライカーに制動をかけて追撃を止めた。ミーナ隊長が言うなら止めた方がいい。まだ短い時間でしかミーナ隊長のことを見ていないけれど、的確な指示はいつも見事だと思っている。それに私は大局を見て判断するなんて器用なことはできない。だからこそ、ここは引いた方がいい。

ストライカーの出力を調整してホバリング姿勢に。ネウロイが消えていく方向をじっと見つめた。

あの音はなんだつたんだろう。ネウロイが発していた音だつたようだけれど、ネウロイには发声器官があるんだろうか。

「あれはいつたい……」

問いかけてもサニーヤの記憶は何も教えてくれない。

…………問題が起きた。ものすごく大きな問題が。

こんなことになるなんて思つてもいなかつた。まさかこんな事態になるなんて。

「うーん、ムニヤ……」

「えへへ……リーネちゃんやわらかいなあ…………」

頭を抱えたい。こんな状況になるくらいなら、あのよくわからないネウロイを無理してでも倒しておくべきだつたかもしれない。

私の部屋で、私のベットにはエイラと宮藤さんが寝つていて。それもぐっすりと。今このところエイラを挟んで宮藤さんが寝ていてるおかげで私に目立つ症状は出ていないのが不幸中の幸いといったところだろうか。エイラシールドはどこまで有効かわかつたものじやないけど、不自然に思われることさえなければいい。

「はあ……」

思い返すことしばらく前。ミーナ隊長の提案によつて夜間哨戒の強化が決定された。

そこで夜間哨戒の人員を増やすことが決まったのだけれど、それが私にとつて一番の問題だつた。

宮藤さんはまだいい。彼女はサニーヤを知らないから、私がサニーヤではないと見破られる恐れはない。

本当の問題はエイラだ。

現状で危険なのはエイラだ。501統合航空戦闘団の中で私の正体を見破つてしまふ可能性がもつとも高いから最大級に警戒していた。

だから私は散々ためらつても、無理に自分を押し切つてエイラの隣で寝るようにしたのに、まさかこんなことで余計な接触を増やしてしまうことになるなんて思つてもみなかつた。接触が増えてしまうと見破られてしまうリスクが増えてしまう。

けれど、不幸中の幸い、とでも言うべきかもしれない。前回のエイラと一緒に寝たケースと同じで解決する方法がある。

「あれを倒せば……」

あのネウロイを私が取り逃がしたから夜間哨戒の人員を増やすことが決まった。なら早々にネウロイを仕留めてしまえば、夜間哨戒の強化も止まる。前のように私一人での哨戒に戻れば、疑われるかもしれない場面を減らすことができる。

何がなんでもあのネウロイを倒さなくてはならない。これ以上、不安要素を増やすよ

うなことは絶対に防がなくてはいけない。

「むにゅう……」

「―――いがいつぱいだあ……」

エイラと宮藤さん。この2人にもがんばつてもらわなくてはいけない。あのネウロイを私だけで倒すことができないのなら、あの2人の力を借りてでも倒せばいい。私の固有魔法の特性上、ネウロイを捉えることはできても戦闘向きな能力じゃない。さらにその後の戦闘において私のフリーガーハマーでは手数不足になりやすい。

その点ではエイラの固有魔法は未来予知でネウロイの動きが読めるという、いかにも戦闘向きな能力だし、宮藤さんの膨大な魔力はシールドにも攻撃にも転用できる。そして2人の持つ武器は私のフリーガーハマーよりも連射性に優れている。

問題は宮藤さんは夜間哨戒の経験がないこと。エイラは慣れている様子だが、彼女はまだウイッチになつてから時間が浅い。昼の飛行とは違つて夜間飛行は難しい。それをいきなり宮藤さんにやらせるミーナ隊長の意図はわからないけれど、それならそれでいい。

彼女には夜間戦闘ができるようになつてもらおう。

だからできるように夜間戦闘に慣れている私が全力でサポートする。私だけでは難しくともエイラだつていて。そして宮藤さんが夜にも戦えるようになつてくれれば、あ

のネウロイを倒すことも簡単になる。

「明日の夜からが本番……」

一日でカタをつけることはできないと思う。けれどできる限り時間はかけたくない。目標は一週間以内に終わらせる。あまり手こずると本格的にエイラが気づくかもしない。本当に厄介なこと極まりない問題だつた。

でも方針は決まつた。だからもう眠ろう。コンディイションは万全にしておかないと、私が足を引っ張つてしまふかもしれない。

そういえばしばらくは1人でいられる時間もなくなつちやうな……。

第6話 おふろ

なんとかして素早く例のネウロイを倒してしまおう。私はそう決意して、そのために宮藤さんを夜間哨戒できちんと戦えるように仕上げようとしていたはずだつた。

そうして搜索を始めて今日で3日目だつた。ネウロイは影も形も見せない。

ネウロイが倒されなければ今、動いている夜間哨戒のシフトは元に戻つてくれない。急がなくてはエイラに気づかれてしまう。なんとかして早く片付けなければいけない。けれど遅々としてネウロイは発見できない。

時間だけが過ぎて、焦りだけが積もっていく。このままではいけない。ついこの間、エイラとの接触は最小限にすると決めたばかりなのに、添い寝に始まつて連日の夜間哨戒と来ている。これでは本当に私がサーニャではないと気づかれてしまう。

今、この状況だつて危ない。私は私の部屋で私のベットの上にいる。けれど私は1人ではなかつた。私のベットの上にはあぐらをかくエイラといわゆる女の子座り宮藤さんがいる。

この状況を危ないと言わなくて何と言えばいいのだろう。

「ねえ、サーニャちゃん。サーニャちゃんの二両親はどこにいるの？」

「オラーシャにあるウラルの山を越えたもつと、ずっと向こうまで。詳しい場所は……わからぬ」

サニーヤの記憶を頼りに宮藤さんの問い合わせに答える。幸いなことにこの記憶は穴が空いていなかつた。だから答えることができた。もし答えられなかつたら不審に思われていたかもしない。ちゃんと答えることができてよかつた、と心の中だけではつと胸を撫で下ろしていた。

「そつか……よかつた」

「何がいいんだよ？　話を聞いてないのか、お前？」

「だつて今は離れ離れでもいつかきつとまた会えるつて事でしょ？」

確かにそうかもしれない。サニーヤのご両親は亡くなつてゐるわけではないようだし、きつとまた会うことはできるかもしれない。

さすがの私にもわかるけれどウラル山脈の向こう、ということはロシアが広がつている。そんな中からたつた2人のご両親を探し出すのはどれだけ大変なことだろう。

「あんな、オラーシャは広いんだぞ。探すつて言つたつてそう簡単に見つかるもんか」「でもサニーヤちゃんは、早く家族と会いたいって思つてるでしょ？　だつたら、サニーヤちゃんの家族だつて絶対、サニーヤちゃんと早く会いたいって思つてるはずだよ。そうやつてどつちも諦めないでいれば、きつといつかは会えるよ。そんな風に思えるつ

て、素敵なことだよ」

私はお父さんともう会えないから、どこか寂しそうな笑顔で宮藤さんが笑った。

きっと宮藤さんは両親に愛されていたのだとと思う。今も昔も。そしてお父さんが亡くなってしまったとしても、お母さんからずつとこれからも。

だから宮藤さんは幸せな人だ。

両親に会いたい。そう思つていればきっと会える。そんな美しい理想が口にできる宮藤さんは本当に幸せだと思う。

きっと彼女は知らないんだろう。世の中には親に会いたくないと思つている人がいるなんてことを。この世界にあるかはわからないけれど、親に虐待を受けた子供を保護するための施設があるなんてことは絶対に知らない。そうでなくてはあんな言葉は出でこない。

「寝るのはもうムリだな。サウナでも行くか」

「は、はい！」

「え……」

「サーニャは来ないのか？」

エイラが一声かけると私も宮藤さんも立ち上がった。もう日が落ちてきた頃だ。夜

間哨戒の前にお風呂の代わりとしてサウナに入ろう、ということなんだと思う。

はつきり言つて断りたい。サウナということは服をすべて脱がなくてはいけない。つまり最後の砦だつたショーツ、いやズボンとブラもなくなつてしまつていうこと。

けれど断つてしまえばそれはそれで不審がられる。変だと少しでも思われてしまうことすら避けなくてはいけない。

「ううん。行く」

「じゃあ行くぞー」

気が向かない。本当にやめてほしい。なんでこんなに肌面積を広々と晒す機会に恵まれてしまうのだろう。いい加減にしないとそろそろ私の限界がきてしまう。他人といるのでさえ苦しい私に対してもこの世界は厳しい。

「サーニーヤ？ 先に入ってるぞ？」

「うん。すぐ行くわ」

サウナに入る前に服を脱がなくてはいけない。でも脱いでいるところは見られたくない。だから宮藤さんとエイラには先に行つてもらつた。完全にいなくなつてからズボンを足から抜いて、ブラを外してから籠にそつと入れた。大き目のバスタオルを体に巻きつけて、なんとか際どいところは隠しきつた。髪を別のタオルで纏め上げるとサウナルームに足を踏み入れて、エイラと宮藤さんから変に思われないくらいに離れた場所を選んで腰を下ろした。

サウナに入つたことはほとんどない。ムシムシとして暑い。でもサウナとはこういうのらしい。

「それにもしてもサーニヤちゃんつて肌、白いよね」

「どこ見てんだ、お前」

「それにすべすべだし。いいなあー」

褒められるのは慣れていない。だからお願ひだから触れないで欲しい。そもそも褒められたところでサーニヤが賞賛を受けているのであって、私は関係ないのだけれど。 そうだと見られると視線が気になつてしまふ。

「羨ましいなあ」

「さ、サーニヤをそんな目で見んなあーー!!」

ドタバタと後ろでエイラが宮藤さんに飛びかかる。私としてもジロジロ見られると息苦しくなるから視線を遮ってくれるのは助かつた。

そして今がチャンスかもしれない。エイラの視線も宮藤さんの視線も私から外れた。つまり今ならサウナから抜け出すチャンスだ。正直に言つていくらバスタオルである程度は隠していても、露出度は高い。そのせいかだんだんと呼吸が苦しくなつていた。これ以上いたら倒れてしまうかもしれない。

ちらつと後ろを見て、さりげなく様子を伺つて。そして私が目に入つていなことを

確認したら気づかれないようにこつそりとサウナ室から逃げ出した。

「涼しい……」

外に出るとひんやりとした風が素肌を撫でた。火照った体には気持ちがいい。このまま水風呂がわりの川に浸かるらしい。まだ私の体の芯は熱を持っている。それに汗もいっぱいかいてしまったから流してしまいたい。

草の茂みを越えて澄んだせせらぎをたたえた小川へ。流れの穏やかな場所を狙つてゆっくりとバスタオルを外してちやぶん、と肩まで浸かつた。

「んっ……」

ひやつとした感覚に思わず声が漏れた。水の冷たさにびっくりしたけれど、慣れてくるとこれもけつこう気持ちがいい。意外とサウナつていいものかもしれない。そう思ふくらいには気持ちがよかつた。

「でも、これって外……」

そう、唯一の問題は野外であることだった。露天風呂なんていうものではなくて、完全に外。囲いなんてものはない。女性しかいないから大丈夫ということなんだろうけど、外で裸になつていると考へると落ち着かないものがあつた。なんだかとつてもイケないことをしている気分だ。

いくら覗く人がいないとはいえ、いろいろ全開になつてるのはやっぱりソワソワす

る。せめて手で隠すくらいは……

「あつ……ま、待つて」

たまらず手で隠そうとした時、持っていたバスタオルが手から離れて流れていってしまった。いくら流れが緩やかではないようでも川は川。それにバスタオルは広がっているせいで流れに乗りやすい。

焦つて私はバスタオルを追いかけた。でも水の抵抗があつてうまく歩けない。同時に隠しながら歩こうとしているのだから当然といえばそれまでだけれど。もたもたやつているうちにバスタオルは流れていってしまった。

「タオルが……」

ぽつん、と私は佇んだ。バスタオルがないだけでこの心細さはなんだろう。ただでさえ外なのに最後の鎧だったバスタオルさえもなくなってしまった。

私はごつごつとした岩にぺたんと座るようにもたれた。迂闊だつた。これではもう隠せるものがない。心細さどころか何かがせり上がるような感覚すら覚える。

「ら、ららー。ららーららー、らららー」

小さく歌を口ずさむ。歌はいい。何もなくたつてできる。それにこれで少しは気がまぎれるかもしねれない。

事実、私が1人のときに歌を口ずさむことが多いのは私のストレス発散みたいなもの

だつた。でも誰かに聞かれるのは恥ずかしいからできる限り1人で歌うようにしている。

「あつ」

なんて不幸なんだろう。この時ばかりは自らの不運を本気で呪つたし、なんでいつもこんな目にと思わざるを得なかつた。

私がいる岩とは違う別の岩の影でエイラと宮藤さんが私の方を見ていた。
つまりこれはばつちり聞かれていたということなんだろう。

「ついてない……」

どうして私が歌うときに限つて必ず誰かが聞いているんだろう。せめて1人のときくらいは私でいさせてくれてもいいのに。

また内心で深いため息。私の時間はもうお終い。またサニーヤにならなくちゃ。

けれど私は息苦しさを覚え始めた。サニーヤにならなくちゃいけない。わかつているはずなのに、演じる余裕がない。

できたことといえばとつさに両手で隠したことくらい。それ以上のことはできなかつた。

「サニーヤ、大丈夫か？」

「もしかしてサウナでのぼせちゃつた？」

「う、うん」

「ごまかすにはちよどいい口実が与えられたのはラツキーだつた。これに飛びつかない手はない。息苦しさも体の強張りも私のものであつてサーニヤのものではないのなら隠さなくてはいけないだろう。」

「どれどれーっと」

「え、エイラ?」

「ずいっとエイラが私に近寄つた。もちろんエイラも裸で、しかもバスタオルを巻かずに、だ。」

「なんで恥ずかしくないんだろう。いくら同性だとしても私だつたら卒倒する。とにかく近い。近すぎる。額がぴつたりと触れ合う。」

「んー、熱はなきそうだなー」

「あ、あ、あ……あう」

「もう、限界です……」

第7話 よしかちやん

ストライカーユニットを装着してフリーガーハマーを掴んだ。グン、と慣性力が体にかかり、私は空に飛び出した。すぐにあとを追つてエイラが隣を飛んで、少し遅れて宮藤さんが空に上がった。

ひんやりとした風が肌を撫でる。夜はやっぱり肌寒い。それでも魔法のおかげか普通に飛んでいられる。

宮藤さんが加速。くるりと横にロールすると楽しそうに笑う。

「実はね、今日は私の誕生日なんだ！」

「バカだな、お前。こういう時くらい楽しいことを優先してもいいんだぞ」

「ええっ？ そ、そうかなあ……？」

「それにしても宮藤も今日なんだな」

「私も？」

「今日はサニーニャの誕生日もあるんだ」

「なんだ……。そういうえばカレンダーに何かマークが書かれていたけど、あれはそういう意味だつたみたいだ。

サニーヤの誕生日。ならサニーヤはまた一つ、大人になつたのだろう。やつぱり私は
サニーヤは年下だつた。私なんかよりずっとしっかりと接しているし、ちゃんと人と接す
ことができるみたいだけど。

「へえー。サニーヤちゃんも今日がお誕生日なんだ！」

「ええ。そうよ」

本当は今の今まで知らなかつたけど。珍しいこともあるものだとは思つたけれど、よ
く考えれば世界には何億人もいる。同じ誕生日の人くらいはいくらでもいるのは当然
かもしだれない。

「ねえ、宮藤さん。耳を澄ましてみて」

「えつ？……あ、何か聞こえる！　これは……ラジオ？」

「夜は空気が澄んでるから電波が通りやすいの。だからラジオの電波が拾えるのよ」

これも最近になつて気づいたばかりのこと。サニーヤの固有魔法を使つていてるうち
に電波をキャッチしていいるという特性に気づいた。

そしてこの特性を利用すると、ラジオ放送が聞けるのだ。少しよくない利用法として
は盗聴もできる。あんまりいいことだとは思えないからやりたくはないけれど。

「サニーヤ。あれは秘密なんじやなかつたのか？」

「そ、そだつたの？」

宮藤さんが素つ頓狂な声を上げる中で私も焦った。エイラとサニーヤの秘密だつたなんて知らなかつた。そうだと知つていたら絶対に言わなかつた。気づかれないように警戒しているはずなのに、どうもペースが乱される。なんとかフォローをしないといけない。

「ごめん。でも今日は特別な日だから……」

「んん……まあ、しようがない、のか？」

エイラが首を傾げる。完全に宮藤さんのことを使にしたけれど、本人が気づいていないからセーフということにしよう。楽しそうに宮藤さんも空を飛びながらラジオを聞いていることだし、きっと大丈夫。

「すごいなあ。こんなこともサニーヤちゃんはできるんだ！」

「ふふん。サニーヤはすごいんだぞ」

「なんでエイラさんが自慢げなの……？」

たしかに。サニーヤの固有魔法の力のおかげでラジオを聞けている。これを私が誇るのはお門違いだけど、エイラが誇らしげなのも不思議だと思う。

「あれ、これラジオじゃない……？」

「ん、ホントだな。なんだこれ？」

「なんか……サニーヤちゃんに似てる？」

「まさかネウロイが真似しているのか!?」

ノイズのようなものがインカムから流れた。どこか歪な音で不規則そうでありながら一律のリズムを刻んでいるようなこれは聞いたことがある。

体中がざわつく。この音は忘れるわけがない。プロペラ機を迎えに行つたときに遭遇したネウロイ。

そう、この夜間哨戒をするきっかけになつたあのネウロイだ。これを倒せばすべて片付く。

ストライカーの出力をあげる。宮藤さんとエイラを置いて一気に上昇した。せつかく何日も探し続けてようやく掴んだチャンスだ。こんなことで逃がすわけにはいかない。

ラジオの電波を受信するのに割いていた分の魔力もすべて索敵に回す。この眼下に広がる雲海のどこかにネウロイがいる。絶対にここで落とさなくてはいけない。

「どこ……どこにいるの……？」

目を凝らしたところで分厚い雲を見透かすことはできない。ひたすらに魔力を集中させて魔道波を飛ばして探す。

「つ……」

見つけた。けれど同時にネウロイがビームを放ってきた。急いで左にロール。慣性

力が負荷として体にかかるけれどもそんなことを気にかけている余裕はない。

「サニニヤ！」

「サニニヤちゃん！」

ロールを繰り返してビームを避け続ける。でも魔法に集中しながら機敏に動き回ることは想像以上に難しかった。なにより魔力を索敵にすべて割いているせいでシールドがうまく展開できない。

そのせいで左足のストライカーにネウロイのビームが擦つた。ただ擦つただけ。それだけのはずなのにストライカーがもぎ取られて、左足が露出する。黒のストッキングは伝線してしまい、サニニヤの白い足に細やかな傷がついた。

ストライカーの出力が左のストライカーがなくなってしまったせいで大きく落ちた。それだけで致命傷だ。またネウロイのビームが直撃コースで飛んできたらもう避けられない。

でも幸いにもフリー・ガーハマーは掴んだままだ。ならまだ戦える。なんとしてもあのネウロイだけは……

「バカ！ 1人でどうする気だよ！」

「サニニヤちゃんだけではムリだよ！」

エイラと宮藤さんが私の隣に追いつく。再び放たれたネウロイのビームを宮藤さん

が展開したシールドが弾いた。

残念だけれどあのネウロイは逃がすしかない。私が焦りすぎてネウロイの攻撃に当たつてしまつたから撤退になつてしまふだろう。このまま被弾した私がいてはエイラも宮藤さんも危ない。

ぜんぶ、ぜんぶ私のせいだ。せつかくのチャンスを私の焦燥感が台無しにしてしまつた。

「2人とも逃げて」

「そんなことできないよ！」

「あのネウロイはサーニャを狙つてる。サーニャを一人になんてできるもんか」

「でも……」

私は俯いた。この状況では私は足手まといだ。

だから私は悩んでいた。これは私のミス。サーニャのせいではない。2人を無事に帰さなくてはいけないのは当然だけれど、サーニャも無事に帰さなくてはいけない。

でも現状において2人を帰すために確実なのは私が囮になること。2人はきっと基地に帰つたら救援を呼んでくれる。あとは私が救援到着まで逃げ切ることができればいい。

そんなことが不可能なことくらい重々承知だけれど。

どれだけ救援が急いだとしても2時間弱はかかる。それまで片方だけのストライカーユニットで凌ぎきれるとはとても思えない。もちろん足搔いてみるつもりだけれど苦しいのは自明だ。

「サニニヤ、それ借りるぞ。宮藤、サニニヤを」「わ、わかりました！」

「え、エイラ？」

「サニニヤはネウロイの位置を私に教えてくれ」

エイラが私の手からフリーガーハマーを取ると元から持つっていた短機関銃をスリングで吊ると、構える。

まさかエイラはネウロイと戦うつもりなんだろうか。足手まといになつてしまつた私を守りながら。

「でも……」

「大丈夫。私の固有魔法は未来予知だ。あいつの攻撃は当たらぬよ」

それでも危険すぎる。そんな危ない目に合う必要なんてないよ。

そう言おうとした。でもこの口はうまく動いてくれない。まるで石にでもなつてしまつたかのよう。

「あいつは一人ぼっちだけどサニニヤは一人じゃないだろ？　私たちは絶対に負けない

よ！」

「そ、うだよサニーヤちゃん！」

「サニーヤ！ 教えてくれ。敵はどこにいるんだ」

「わからぬ。だから帰つて。危ないから。2人とも死んじやうかもしれないんだよ。

そう言わなきやいけないのに私の口は意に反して別のことを行走る。

「ベガとアルタイルを結ぶ線の中間。天の川をまっすぐに進んでる。距離は3200

よ」

「こうか？」

「高いわ。射角をもう少し落として」

「これでどうだ？」

「うん、だいじょうぶ。3秒後に発射」

「3、2、1……いけ！」

白煙が尾を引いてフリーガーハマーからロケット弾が3つ、飛び出した。それぞれが雲海に刺さり、雲を吹き飛ばして大穴を空ける。

「外れた！ 次！」

「進路はそのままよ

「こつち来んな！」

エイラがまた2発、ロケット弾を撃つた。広い範囲で爆発が起き、千々にちぎれ散る。ダメ押しでエイラがもう1発、発射するとドムツ、と雲が散つた。

「だめか?」

「ううん。当たつたわ」

私の固有魔法はしっかりと捉えていた。よく目を凝らすとキラキラとネウロイの破片が飛び散る雲に混ざっている。

当たつた。フリーガーハマーの残弾はもうない代わりに一撃が入つた。

けれど安心したのもつかの間だつた。破れかぶれなのか、ネウロイはビームを連射しながら私たちの方へ突っ込んできた。

「来るなつて!」

エイラが短機関銃に持ち替えて鉛弾をばら撒く。だがネウロイもやられるがままであるわけがなく、さらにビームの数を増やしながら突っ込んでくる。

いくらなんでもこの数は危ない。その時、私の体が前に引っ張られた。

「やあつ!」

私を支えながら宮藤さんがエイラの前に巨大なシールドを張つた。そのシールドは連続して飛んでくるビームを弾いて内側にいる私たちがネウロイのビームに曝されることを防いだ。

「気が利くな、宮藤」

エイラが銃撃の手を休めずに撃ち続けながら言つた。宮藤さんがシールドを張つたことによつてエイラは避けることを考える必要がなくなつた。

「大丈夫。私たちならきっと勝てるよ！」

「それがチームだろ！」

必死にシールドを張り続けてくれる宮藤さん。私たちにぶつかる前になんとしてもネウロイを倒そうと必死になつてくれているエイラ。

あのネウロイが私を狙つているのだから、エイラも宮藤さんも私を見捨てて逃げれば無事に帰ることができるくらいわかっているはず。それでも彼女たちは戦つてくれている。

ああ、これがきっとサニーヤの命の重みなんだ。

考えが甘かつた。サニーヤがどれだけ多くの人に大切にされているのか私はこれっぽつとも理解していなかつた。

そしてどれだけ彼女たちが仲間を大事にしているのかも。きっと誰が何と言おうと彼女たちは仲間を見捨てない。本人が見捨ててと頼んだとしても、絶対に助けようとするんだろう。

仲間だから。それだけでも命を懸ける理由として彼女たちにとつては十分すぎる。

だから彼女たちは大空を飛ぶ。守りたいもののためにその命を燃やして。

それがウイツチなんだ。

「芳佳ちゃん、少し貸して」

「ええっ!? サーニャちゃん!?

シールドを張っている宮藤さんから機関銃を取ると構えた。早くネウロイを倒さなくちゃ。その一心だけで名前を呼んだことも無意識だった。

フリーガーハマーなら撃つことはある。でも機関銃は初めてだ。でもなんとかしなくてはいけない。

落ちて、落ちて、落ちて。

私とエイラの機関銃から鉛弾が吐き出され、ネウロイから放たれるビームを宮藤さんが弾く。銃弾がネウロイに刺さるたびに破片がこぼれ散る。

固有魔法のせいでネウロイが接近しているのが実感しやすい。けれど不思議と怖くはなかつた。

私とエイラのどちらかはわからない。でも確実にどちらかの弾がネウロイのコアを捉えた。ネウロイのコアが碎け、そしてついに破片となつて飛び散った。

「やつつけた……？」

「まだ聞こえるわ」

「これ、ラジオだ。誰かがピアノを弾いてるんだ」

「これってサニーヤちゃんがよく歌つてる歌だよね？」

確かにその通りだつた。私はまつたく知らないのに、ついつい口をついて歌つてしまふよくわからないメロディー。それがピアノで演奏されてラジオに流れていた。
「これはサニーヤの歌だよ。サニーヤのお父さんがサニーヤのために作ってくれた曲だろ？」

「え、ええ。そうよ」

知らなかつた。私は知らないメロディーのはずなのになんとなく口ずさんでいたけれど、この曲はサニーヤのお父さまがサニーヤのために作つた歌らしい。

その曲のピアノがラジオで流れている。広く公表された曲ではないということは演奏できる人は必然的に絞られる。

1人はサニーヤ。よく口ずさむ曲なら楽譜を覚えていても不思議じやない。

そしてもう1人はサニーヤのお父さま。この曲を作つた本人なら弾けないわけがない。

サニーヤは今、弾ける状況下にない。なぜなら私がサニーヤの体に入つてしまつてい

るから。

なら誰がピアノを弾いているのか。サニーヤのお父さまに決まっている。

「じゃあこの空のどこからラジオに乗つてサニーヤちゃんのお父さんの演奏がここまで届いてるんだ！」すごいよ、奇跡だよ！」

「奇跡なもんか。今日はサニーヤの誕生日なんだ。サニーヤのことが大好きな人なら誕生日を祝うのは当たり前だろ？」

「エイラさん優しいんですね」

「なんなんじゃねえよ、バカ……」

エイラが照れて頬を染める。そんな中で片足だけになつたストライカーの出力を私はあげて高度を上昇させる。

「お誕生日おめでとう、サニーヤちゃん」

「あなたもでしよう、宮藤さん」

上から見下ろすような姿勢で宮藤さんに言つた。それを聞いた宮藤さんが小さく首を傾けた。

「サニーヤちゃん。せつかくだから名前で呼んで。ほら、さつき呼んでくれたみたいに」

「えつ、えつと……」

「だめ、かな？」

ここで断るのもよくなき気がする。なにより彼女は私のために命を危険に晒してシールドを張つてくれた。

「お誕生日おめでとう。よ、芳佳ちゃん」

「おめでと、だな」

「……ありがとっ！」

まだサニーヤのお父さまのピアノは流れていた。演奏に乗つてゐる女性の歌声はサニーヤのお母さまだろうか。私がわからなくとも直感的にそんな気がした。

「お父さま、お母さま。ここです。ここに私はいます」

私はいる。そしてサニーヤはいない。あるのはただサニーヤの体だけ。

だから私は死ねない。

第8話 びあの

「ねえ、サニーヤさん。お願ひがあるんだけどいいかしら？」

基地に帰ってきたばかりのミーナ中佐に私は呼び止められた。何だか大事そうに紙袋を抱えているミーナ中佐の目の端は赤い。

あれは目をこすった跡。何度も何度も見てきたからわかる。ぶたれた痛みに泣きじやくつた後から鏡越しに見た私の顔はちよどあんなふうだつた。

そんな泣き腫らした目をして私に何の用事なんだろう。

「えつと、なんでしようか？」

「そんなに硬くならないで。命令つてほどじやないの。単なるお願ひなんだけど、サニヤさんつてピアノが弾けたはずよね？」

「はい」

サニーヤはピアノを弾けたらしい。どれくらいの腕なのかは私にはわからないけれども私だつて実はちょっとくらいなら弾ける。

私の名ばかりだった家庭が崩壊してから私は施設に引き取られた。そして偶然にも

そこの施設にはピアノがあつた。

グランドピアノみたいに立派なものじゃなくてアップライトピアノだつたけれど、それでも十分すぎるくらいいい音は出た。後から聞いた話だと寄付されたものだつたらしい。

まだ幼い頃の私はそのピアノがとても素敵なものに見えた。だからどうしても少し触つてみたかった。

ある日、私は勇気を振り絞つてこつそりと私はピアノの鍵盤を押してみた。それは何の音だつたか思い出せないけれど、澄んだ綺麗な音がしたことだけは覚えている。

そして本当に幸運なことに、その施設に来る人でピアノの弾ける人がいた。その人は私がおそるおそるピアノを触つてているところを見ていたようで、「こう弾くんだよ」と私の目の前で簡単な曲を弾いてくれた。

以来、私はその人からピアノの弾き方を習つた。一時は身投げまで考えた子供の私をこの世につなぎ止めてくれたのはピアノだつた。

ちゃんと教室に通つたわけじやない。たまに来てくれるあの人が来るたびに少しずつ教えてもらつては、私がひとりで練習していただけ。だからそんなにうまいわけじやない。でも弾けるかどうか、と聞かれたら弾ける方だと思う。

「これを弾いてほしいのだけど、弾けるかしら？」

「これは……『リリー・マルレーン』ですか？」

「ええ。弾けそう？」

ミーナ中佐に渡された楽譜に目を通していく。弾いたことのない楽譜。けれど難易度はそこまで高くなさそうだ。

即興とは言わずとも、これなら数回ほど練習すればきっと弾ける。

「ミーナ中佐。ピアノ、お借りします」

「じゃあ、やつてくれるのね？」

「はい。でも先に少しだけ練習させてください」

「それこそ大丈夫よ。私も少しやらなきやいけないことがあるから」

「じゃあ先に練習しておきます」

「ごめんなさい。お願ひね」

「ごめんなさい。お願いね」
ぜんぜん大したことじやない。それに前々からあのグランドピアノは気になつていた。

具体的に言うと少し触つてみたかった。だからこれは私にとつても渡りに船の提案だつた。

まだ誰もいない広間の真ん中に安置してあるグランドピアノに寄ると、慎重に重い蓋

を押し開ける。

そして軽く鍵盤を押してみた。

「やっぱり少し重い……」

さすがはグランドピアノ。鍵盤がアップライトピアノよりも重い。強弱の付け方はアップライトピアノで弾いていた時より、強めに鍵盤を押した方がいいかもしない。

楽譜立てにミーナ中佐から渡されたりリリー・マルレーンの楽譜を立てかける。

それから最初の数小節を弾いてみた。慣れてきたらだんだんと演奏にペダルを入れてみる。

やっぱりいい音だ。響き方が違う。一音ごとにどつしりとした重厚感がある。

数回ほど弾いてみれば、だんだんと鍵盤の重さも気にならなくなってきた。完全に感覚を取り戻すにはもうちょっと時間がかかるけれど、それでも軽く弾くぶんにはなんとかなる、はず。

「サーニャさん。そろそろなんだけど大丈夫かしら？」

カツン、カツンと床を踵が叩く音が響く。いつたんピアノを弾く手を止めて振り返る。

やつて来たのはミーナ中佐だった。けれどいつもみたいなかつちりとした軍服姿じゃなくて、素敵な赤いドレスに身を包んでいた。背中の部分が開いているせいで、肩

や背中が惜しげもなく外気に晒されている。でも嫌な感じを覚えさせる露出ではなくて、むしろミーナ中佐自身の魅力を引き出すようだつた。

「はい……ミーナ中佐、とっても綺麗です」

「ふふ、ありがとう」

柔らかくミーナ中佐が微笑む。どこか誇らしげで、それでも少し寂しげな微笑みだつた。

「ちょっと待つてて。そろそろシャーリーさんが……ああ、来たわ」「ミーナ中佐。ここでいいのかー?」

「ええ。ありがとうございます。そこに置いて」

「はいよつと」

見ただけでも重そうな通信機材を明るい色の髪を腰あたりまでのばしたシャーリーさんがドスンと床に置いた。ぐぐつとシャーリーさんが伸びをしながら見渡していると、どこか小動物的なツインテールの少女がマイクスタンドを持ってきた。

「シャーリー！ 持つてきたよー！」

「よし！ ルツキーニ、マイクスタンドはそこに立てるんだ！」

「はいはーい！」

シャーリーさんの指示によつててきぱきと舞台がセットされていく。どうやらミー

ナ中佐はこれを放送するつもりらしい。

どうしよう。そんなこと聞いてない。

でも今更になつて断るのも気が進まない。それにこの基地でピアノをまともに弾けるのはサニニヤ、つまり私しかいない。

途端に体が固まる。
人前で弾いたことがないわけではないけれど、
無線で拡散するな
んて経験はゼロだ。

もう覚悟を決めるしかない。私が迷っているうちに気づけば舞台はセットされてしまった。しかも出撃中の人たちを除いて全員がこの広間に集結してしまっている。

「ニヤリ

深呼吸をして息を整える。踵を床につけて右足をペダルに乗せた。指を立てて鍵盤

にそつと触れる。

全体的な曲調はすこし弱めに。
テンポは歩くような速さで。

私の指が鍵盤の上を撫でるように踊り始める。しばらくすると私のピアノに歌声が乗つた。

優しくて伸びるような歌声だ。これがミーナ中佐の歌。

ほんの気持ちだけピアノのボリュームを落とした。あまり強すぎるとミーナ中佐の

歌と喧嘩してしまう。

この舞台の主役はミーナ中佐だ。私の役目は独奏ではなくて伴奏。主張の強い演奏をするのではなくて、ミーナ中佐の歌声を引き立たせる演奏をしなくてはいけない。ペダルはあまり踏み過ぎないように。リズムは一律に保つて。ミーナ中佐が歌いやすいように。ミーナ中佐が思いのままに歌えるように。

ミーナ中佐の歌声とピアノの演奏がゆるやかに広間に響き続けた。

そしてミーナ中佐が広間からいなくなり、他のメンバーもそれぞれの部屋に帰つていく。

「ん？ サーニヤはまだ寝ないのか？」

「すぐに寝るわ。ありがとう、エイラ」

今夜は夜間哨戒のシフトもない。今夜の私はゆっくりと眠る自由がある。

でも、布団に入るのはもう少しだけ後。自分の部屋へ戻つていくエイラを見送つて、広間に私以外がないことを確認すると、そろりそろりとピアノへ近づく。

この部屋が防音になつてているのは確認済み。少しくらいピアノを弾いたつて漏れる音はほとんどないから、他の娘たちの迷惑にはならない。

久しぶりにピアノを弾いてちょっぴり懐かしくなった。だからもう少しだけ弾きたかった。

改めて椅子に座りなおす。丁寧に蓋を持ち上げると、鍵盤に手を添えた。弾きたい曲は決まっている。楽譜はないけれど、暗譜しているから大丈夫だ。

「作曲フランツ・リスト。愛の夢第2番ホ長調『私は死んだ』」
小さな声で曲名を言うと柔らかめのタッチで私はピアノを弾き始めた。昔から何がある度に弾いているお気に入りの曲だ。サニーヤが弾いたことなくとも、私が覚えている。

ひとつの音が奏でられる度に様々なものが頭に浮かぶ。それはすべてこの世界に来てからのことばかり。

——最初はとても混乱したな
曲の冒頭は少し弱め。^{メツゾーピアノ}強弱やタメにはかなり私のアレンジが入っているのはいつも

の話。

——初めて飛ぶ空は意外と悪くなかった
ペダルを使いつつ、滑らかに音と音を繋げる。^ラのびのびとした音が途切れることなく広間に響く。

——サニーヤの周りはいい人ばかりで

ほんの気持ちだけ鍵盤を押す力をだんだん強めにしていく。

——だけど

一度は上げた音量を再びだんだん弱く。そしてわずかにタメを入れる。

——なんで私をこんな幸せの中に入れれたの！

ころりと曲調がかわり、強く。（フォルテ）テンポは穩やかに速くなつていく。

——まるで見せつけるかのように！

自分のピアノの音以外は耳に入らない。ただひたすら無心にピアノと向き合う。ペダルを踏み直す足もテンポが上がるに合わせてペースが早まつていく。

——眩しいくらい純粹な笑顔をずっと目の前にされて！

鍵盤上を忙しく指が動き回る。今のは私だ。サニニヤじやない。

強く、けれど雑にならないように。そして曲調を壊すことは防ぎつつ。でも激しさは増すばかり。

——お前は可哀想な子だと突きつけられるようにな！

サニニヤだつてそうだ。誕生日に両親がサニニヤのためにラジオでピアノを弾いてあげる人だ。

私の親だつた人たちとはぜんぜん違う。ずっと理想だけでありはしないと思い続けていた本当の『親』という存在。

私にないものをみんな持っている。当たり前のことだ、と言うように。それをこの戦争が起きている世界ですら当然だと言う。

——ああ、やつぱり私は惨めなんだ
強くで奏でていた音を段階を踏んで落としていく。まずは少し強め、次に少し弱め。
そして弱く。
トランクイロ

最後は穏やかな音になるよう鍵盤を押さえると、ちょうどいいと思えるくらい余韻を残して、鍵盤から手を離した。

「ふう……」

自分の声が耳に届く。周囲の音が返ってきた。よくよく今の演奏を思い返すとだいぶ乱暴だったかもしれない。

「久しぶりに聞いたな、サニーヤのピアノ」

「え、エイラ？ どうしてここに……？」

ぱちぱちと拍手をしてドアの影からエイラが現れた。にやつといたずらっぽい笑顔を浮かべながらピアノのそばまで寄つてくる。

「廊下を歩いてたらピアノの音が聞こえたんだ。サニーヤが弾いてると思ったから引き返した」

少し焦りすぎた。久しぶりに弾けるから舞い上がっていたのかもしれない。だめだ。

私はここで私を殺してサーニャを演じなくてはいけないというのに。

「明日も早いし寝といた方がいいぞ」

「うん。 そうするわ」

ピアノを片付けて椅子を元に戻す。 きっとまた弾くチャンスはある。 その時に弾けばいい。

「じゃあ戻るぞー」

「わかつたわ」

今日はエイラのベッドに潜り込まなくともいい。 寝ぼけているふりをしなくともいいからだ。

せつかく手に入れた一人でゆっくり寝られる時間を大切にしよう。

そんなことを考えていた私の耳にはエイラの咳きなんて何も聞こえなかつた。

「なんかへんだな？」

第9話 セいや

501統合戦闘航空団は解散した。

とても大きな戦いがあつて、ガリアにあつたネウロイの巣は消失した。そしてその結果、ネウロイと水際の防衛線を繰り広げていたガリアは解放され、ガリア戦線にストライクウイツチーズを配備しておく必要がなくなつたとのこと。

いちおう、私もその戦いに参加した。もちろんサニヤとして、だけれど。

残念ながらというか、分相応というか私はろくに戦えていない。エイラが「右だな」、「左だな」と回避行動の指示を出してくれなかつたらビームに当たつていたかも知れない。

でも幸いなことに私も501のウイツチたちも大きな怪我なく戦闘は終わつた。そして解散後にこうしてスオムス基地へ転属扱いになつて、エイラと一緒にスオムス基地へ。

正直、スオムス基地はかなり忙しかつた。どうやらサニヤのようなナイトウイツチと呼ばれる夜間哨戒を専門とするウイツチはかなり数が少ないらしく、私が出づっぱりになることが多い。

けれどスオムスには優秀なウイツチが多い、という喧伝通りさほど私がネウロイとの戦闘に駆り出されることは少なかつた。

だから急に長期任務の話が回ってきた時は何事だろうと思つてしまつた。しかもサンタのコスチュームを渡されてしまつたのだからなおさら。

「サニーヤ、だいじょうぶかー？」

「え、ええ。大丈夫よ」

全然、大丈夫じゃない。どうしてサンタクロースの格好で空を飛ばなくてはいけないんだろう。いや、通説としてサンタは空をトナカイの引くそりで飛ぶものだけれど、私の足に装着されているストライカーユニットはトナカイじゃない。

プレゼントを運ぶ、という意味ではサンタの配役は正しいのかもしれないけれど。

私とエイラに渡された長期任務は輸送機を502統合戦闘航空団のあるペテルブルクまで送り届けること。確かに今日は25日、つまりクリスマス。あまり長い旅路でないことを考えると、今日のお昼過ぎくらいまでにはペテルブルグにある502統合戦闘航空団の基地には届くはず。

だから補給物資がプレゼントで私とエイラがサンタクロース。クリスマスだからちよつとくらい502に小粋なことをしよう、という意図だつた。

「二パのことだからなー。もしかしてひとりぼっちかもしれないもんなー」

「そんなことない、と思うけれど……」

スオムスの基地にいたみなさんもしきりにその『ニパ』さんのことからかうようなフリをしながらとても心配していた。

……ちよつと、羨ましい。

そんなふうに想つてもらえるということはそれだけニパさんが慕われているということ。補給物資だつて、みなさんはあがが足りないこれが足りないと言つていろんなのを詰め込んでしまつて、最後は補給物資が重量オーバーになりかけるようなことまで起きた。

「にしても補給物資、すごい量になつたなー」

「いれすぎだと思う」

「あれやこれやと入れまくつたもんな。ま、ニパへのクリスマスプレゼントだな」

「クリスマス……」

そういえば私のいた元の世界も今頃はクリスマスだろうか。クリスマスとはいつてもそんなに大層なことをした覚えはないし、残念ながら施設暮らしだつた私には素敵な家族との思い出はない。

別に嫌な思い出しかないわけじやない。確かに家庭崩壊するまではいい思い出と呼べるようなものはなかつたけれど、施設に入つてからはそれなりに楽しませてもらつ

た。

だからクリスマスを祝う、という気持ちは理解できているつもりだ。そう、気持ちだけなら。

何がいいたいかというと、サンタの服装がとつても恥ずかしい。

常常々、思つていたことだけどストライカーユニットは足に装着するものであつて、そしてそれはつまり丈の長い服は巻き込んでしまう恐れがあるから着ることができない。だから常にありえないくらい丈の短いスカートやワンピースを着て、太ももをかなり露出することになるわけで。

ようやくサニーヤの服装に慣れてきたばかりの私にコスプレとしか映らないサンタ服はかなりハードルが高かつた。

祝おうという気持ちはわかる。けれど恥ずかしいという感情はどうあつても私の中に居座つてしまふ。

今は空だからいいけれど、降りた時がちょっとびり心配だつた。

「なあ、サニーヤ」

「なに、エイラ？」

「二パのやつ、元気にしてるかなあ」

軽い調子でエイラは言つているけれど、どこか心配そうな色が滲んでいる。

どんな人なんだろう、二パさんつて。

サーニヤは会ったことがある人なのは確かだ。愛称である『二パ』という呼び方を聞いた瞬間、フルネームがぱっと頭に思い浮かんだのがその証拠だ。

でも私は知らない。だからどんな人なのかちよつぴり楽しみだ。サーニヤの回りはいい人ばかり。なので話すこともけつこう楽しみかつたりする。

もちろん、サーニヤではないと気づかれないようにしなくてはならない。細心の注意を払わなければいけないけれど、なんと言うか話していくて心地がいい。

だから私はニパさんと会えることをけつこう楽しみにしていたりする。
……のだけれど。

「エイラ」

「どーした、サーニヤ」

「ネウロイの反応が……」

「どこだ?」

ネウロイ。そのたつた一言でエイラの言葉に剣呑さが宿つた。すばやい動きでMG

42を構えると、鋭い目つきで周囲を見渡す。

「もう少し先。ペテルブルグ基地に接近してゐるわ」

「ちょっと急ぐか」

エイラが速度を上げた。遅れてはいけないと私も少し手間取りながらストライカーの出力を上昇させた。

「ま、502がさつさと片付けてるかもな」

「でも迎撃はひとりしか上がっていないみたい」

「なんだって！」

急に大きな声をエイラが出して、びっくりしてしまった私はあやうくフリーガーハマーを取り落としかける。そんなに驚かれても、実際にサニーヤの固有魔法は大きなネウロイの反応ひとつと、ウィツチの反応がひとつ。

「急ごう、サニーヤ！」

「ええ」

さらにエイラが速度をあげる。今度は手間取らずに私も上げると、ペテルブルグ基地へ急ぐ。輸送機が多少、後ろに置いていかれるけれど仕方ない。とにかく今はペテルブルグ基地に接近しているネウロイの相手が優先。

もし輸送機にネウロイが近づいてもサニーヤの固有魔法で探知できる。すぐに戻れる範囲ならエイラに私が警告すれば大丈夫はず。

「あれは……ニパか？」

ネウロイを視界に収めたエイラが飛び回っているウィツチを見て言つた。どうして

かはわからないけれど、なぜかニパさんしか迎撃にあがつていないうらしい。

「えいっ」

先制攻撃としてネウロイに取り付いていたニパさんが離れたタイミングでサーニヤの経験に身を任せてフリー・ガーハマーを放つ。

いずれも着弾。さすがサーニヤだつた。私はひとりで戦つてゐるわけじやない。私がひとりぼつちだつたら絶対にできなくとも、私の中に残つてゐるサーニヤの記憶が私の背中を押してくれる。

「コアかつくなん！」

エイラがMG42の狙いをつける。間髪いれずに引き金を引いて鉛弾をネウロイにばら撒いた。ネウロイの装甲に弾が食い込むたびに白亜の破片が空中に舞う。

ダイヤのエース。その通称に恥じない活躍ぶりでエイラがネウロイをハチの巣にしていく。もうフリーガーハマーの弾をかなり使つてしまつた私は戦闘の行方を見守るのみだけれど、私の援護をエイラは必要としているだろう。

そして案の定、エイラはペテルブルグ基地に接近していたネウロイを撃破した。

「よー、二パ！」

「イツル！」

顔中をほころばせながらニパさんがホバリング。エイラも同じようにホバリングす

るのに従つて私も少し苦労しながらサーニヤの体に染み付いた動きに任せてホバリン
グ。

まだ油断はできないため、サーニヤの固有魔法で周囲を確認。ネウロイの反応は……
ない。

「敵撃破確認。オールグリーン」

「サーニヤさん！」

今度は私に気づいてニパさんが嬉しそうに声を上げた。やはり顔見知り。しかも表情と声の様子からしてサーニヤとは相当に親しい関係。ボロをださないように気をつけないと。

「どうしてここに？」

「えっと、サトルヌスのプレゼントです」

「いい子にしてたかー、ニパあ？」

タイミングを計ったように輸送機が降下してくる。いつのまにか基地の外に出てきていた502のメンバーたちの表情がぱあつと明るくなつた。

そこから後は早かつた。

あれよあれよという間にサトルヌス祭の準備は進められていつた。あつという間にろうそくの灯火で格納庫は照らされ、豪華な料理が長テーブルに並ぶ。

「シユポン！」という軽快な音と共にシャンパンの栓が開けられた。たくさんの泡が空中に飛び出してろうそくの柔らかい火を映す。きらきらと輝いて漂う泡たちはどこか幻想的だ。

「やー、心配してたんだよ。もしかしたらニパのやつ、502に馴染めてないんじやないかと思つてさ」

エイラがいただいた温かいお茶を飲みながら笑う。釣られて私もちよっぴり笑つた。

「心配、ないみたいね」

「そーだなー」

ニパさんには聞こえない場所でエイラも言うあたり、本人の目の前で言うことはちよつと気恥ずかしいものがあるんだろうか。でも心配していた、というのはあながち間違いないじやなくてスオムス基地の方々もなんだかんだと言つて心配しているから補給物資をしきりに多く入れようとしたんだろう。

わいわいと楽しそうな声が至るところから。カチャカチャと食器がぶつかり合い、笑顔があふれてこぼれ出す。

これがサトルヌス祭。これがクリスマス。

「こういうクリスマスも悪くない、かも」

「なんか言つたか、サニーヤ？」

「ううん、なんでもない」

マグカップのお茶をすすつた。温かいものがのど元から食道を通つて胃の中でじんわりと広がつた。

「サニーヤ」

「なあに？」

「メリークリスマス」

はにかみながらエイラが言つた。

「ええ、エイラ。メリークリスマス」

特に示し合わせたわけでもなく、私とエイラが笑う。いろんな人が集まつて、美味しいものを食べて、たくさんのお話をする。こういう形のクリスマスは初めて。でも、けつこういいかもしねない。こんなクリスマスも。

第10話 ゆめ

輸送任務が終わつたからすぐに帰つたか。そう聞かれたら私の答えは「いいえ」だつた。

しばらく私とエイラはペテルブルグ基地にお世話になることになつていて、年を越してからスオムス基地には帰るようになつてゐる。だからこうしてひとり、用意していただいたふかふかのベッドに転がることもできていた。

幸いにもペテルブルグ基地には二パさん以外はサニーヤと直接的な知り合いである人はいないうらしい。だからひとりでいる時間も多く取れるし、私がサニーヤでないと疑われる機会も減る。

当然、何かしらの任務を申し付けられることもあるだろう。けれど私の立場はお客様。よほどの事態や理由がなければ呼び立てられることも、出撃命令が出ることもない。詳しく述べないけれど、命令系統も違うはず。

と、考えていた私の予想はいつものようにあつけなく裏切られてしまつたわけだ。
502の隊長さんは「戦況を教えて欲しい」と執務室へ呼び出され。
なぜかネズミを捕まえただけで給仕係を兼任しているらしいジョゼさんには懐かれ。

そして下原さんという方には「ちつちやくてかわいい」という理由で唐突に抱きつかれ、撫で回された。

とても温かい感情ばかりが向けられる。けれどそれは私に向けたものではなくてサーニヤに向けたものだ。ニセモノの私にとつてはどうにも居心地が悪い。

違うんだよ。私はあなたが見ているサーニヤじやない。ただのまがい物なんだよ。

よっぽどそう言おうかとどれだけ悩んだだろう。でもそれを言うことはすなわち私とサーニヤの喪失を意味する。だから絶対に許されない。私の弱さでサーニヤを消えさせるようなことはあつてはならないのだから。

温かさがどうしようもなく苦しい。私はあなたたちに何も与えられないのにそんな温かいものを向けないで。私はなんの対価も払つていないので。

——だからあなたはわかつていしないんだよ

『何か』が私に話しかける。わかつていない？ なにがだろう。声の出所を探して、起き上がるときよろきよろと辺りを見渡してみる。けれどそこには暗闇が広がるだけ。

——温かさに気づけても、その本質がわかつていないので

今度は違うところから聞こえた。布団を退けて立ち上がりと耳の感覚を頼りに聞こえたはずの場所へ。

同時に考へてしまう。私は何がわかつていかないのか。声の主は私になにが言いたい

のか。

「何が言いたいの？ 私に何を伝えたいの？」

―――あなたは知らない。温かさとは何かを、ね

「だつてこれはサニニヤのもので私のもののじゃない」

―――じゃあ、サニニヤと会つたことのない人からもらつたものはどういうこと？ 思わず言葉に詰まつた。そんな私がさもおかしいのか周囲からはクスクスと笑う声がする。

―――どうしてだと思う？ ほら、答えて

「……わからないよ。私はあんなものを受け取る資格なんてないもの。私はなにも与えられていないのに」

―――ほら、わかつてない

またしても笑い声。それは私をからかうようでありながら、寂しそうで。そしてどうしようもない切なさともどかしさがマーブル模様を描いているよう。

―――わかるよ。理解できないよね。だつてそういう環境で育つたんだから
「どういうこと？ あなたは何を知つて いるの？ あなたは誰？」

同情するようなふうは一切なかつた。けれどまるですべてを知つて いるように私へ

『何か』は囁く。

——私はあなたの知らなくてはならないものを知ろうとしたもの。あなたが見つけたくて、知りたくて。それでも信じられないものを信じたもの。そして……

暗闇の中から『何か』が近づいてくる。思わず身が竦んだ。けれど逃げるという考え

は不思議と浮かんでこなかつた。むしろ近づいてきても、違和感すら覚えない。

——私はあなただよ

『何か』が暗闇を払う。そこには確かにサーニャでない『私』がいた。

——じゃあね。また機会があつたらお話ししよう

「待つて！ どうして私はサーニャの中にいるのっ！」

『私』が背を向けて遠ざかつていく。追いかけようと手を伸ばした瞬間に突風が吹き荒れた。あまりのいきおいに目を開いていることができなくなつて、ぎゅつとまぶたを閉じる。両腕を交差させて顔を覆つて守るような姿勢に。

そして……

「はあっ、はあっ、はあっ」

普段からは考えられない機敏さで私は跳ね起きた。下着はいやな汗でぐつしょりと湿り、額にはあぶら汗が点々と滲む。

「今のは……夢？」

果然としつつ、周囲をぐるりと見渡す。ちちち、と小鳥のさえずりが窓の外から私の鼓膜をそつと愛撫した。やわらかな朝陽がベッドに射しこみ、膝を抱えてうずくまる私を照らす。視線を落とすと雪が染み込んだように真っ白で艶やかな肌が目に映った。依然として体はサニーヤのまま。

どれだけ周囲を見渡したって違和感と言える物は何もない。さつきまで私に話しかけてきた『何か』は見当たらない。ただ変哲もないペテルブルグ基地の一室がそこにあるだけだった。

「ただの夢、なの？」

跳ね除けた毛布を引き寄せてそつと体を包む。ただの夢にしては妙に現実的すぎる。それに怖気がするほど私の状況を言い当てていた。

ただの夢と切つて捨てるとは難しい。

なによりあれはサニーヤでない私を知っていた。他でもない私のことを知り、その上で私の中に踏み込んできた。

一体、あれはなんだったんだろう。私を語るあの『何か』の正体はなに？ あの『私』——認めたくないけれど——が言つていた答えというものがわかれれば私は元の体に戻れるのだろうか。

考へても考へても答えは出そうにない。ただひとつ、確実に言えることがあるとすれば。

あれはたちの悪い单なる夢ではないということ。

夢と言うにはあまりに明瞭すぎた。夢と斬り捨てるにはあまりに現実的すぎた。

ただわからない。それがたまならく怖い。震えの收まらない体を鞭打つて立ち上がらせると、着替えに手を伸ばす。

「やつほー、サーニャちゃーん！」

「んあー、お前！ なにやつ、て……」

……。

このときばかりは文句を言つてもいいと思うし、よく吐かなかつたものだと自分を褒めてあげたい。

なぜか喜色を浮かべるクルピングスキーサンに口をぱくぱくと動かして絶句しているエイラ。そして胃の物を戻さないように必死で耐えている私。

ただでさえ夢のようなものによつて精神的に打撃を受けている私に、裸体を見られたという事実は精神面にショックを与えるのに十分すぎる。サーニャの体に傷はないけれど、もしも私の体であつたのなら傷と痣がいくつも見えたはずだ。

人に裸を見られる。それは私にとつて最大のウイークポイントだつた。服を剥ぎ取

られ、肉親だつた男に暴行を振るわれたトラウマがフラツシユバツクする。

昔と比べたらかなりマシにはなつた。それでも気構えをしていない時に不意を突かれるような形で裸体を見られると、どうしても体が竦んで吐き気を催してしまう。視界にだんだんと靄がかかり始め、めまいがする。責めたてるようになに頭痛を脳が訴え、ついにはいもしない親だつたものたちの暴言までもが幻聴として聞こえ始めた。

「あなたたち！　なにをしているの！」

鋭く一喝する声。それが意識の遠のきかけていた私を繫ぎとめる。

「さ、サー・シャちゃん。これは……」

「まつたく、もう……」

ポクルイーシキンさんが割つて入ると私の肩にそつとシャツをかける。氣づかれないうちに急いで体の震えを押さえ込みにかかつた。時間はあまりない。とにかく気取られるまえに。

そこから後はなにがあつたか曖昧だ。ただポクルイーシキンさんと少し言葉を交わして、それからクルピングキーさんとエイラが連れて行かれたことだけは認識している。

そのくらいに私は動搖していた。

そして気づけばいつのまにか服は着替え終わり、どこも目指していないにも関わらず

廊下をふらふらと歩く。

「あれ、サニニヤさん？」

「雁淵さん……」

声も弱弱しくサニニヤの名を呼んだ方へ振り向く。

「どうかしたんですか？　あんまり元気そうじやないですけど……」

「ううん、大丈夫よ。少しよくない夢を見ただけ」

「夢、ですか……」

うーん、と雁淵さんが頭を傾ける。なんとなく小動物のようだな、と私は遠くでぼんやりと思つた。

「えつと、悪い夢の対処方法、悪い夢の対処方法……」

「そんなにがんばらなくても大丈夫よ」

「がんばりますよ！　だつてサニニヤさん、あんまり調子よくなさそうですもん！」

「心配しないで。大したことじやないから」

「心配しますつ！」

ずいっと雁淵さんが私の側に寄つた。あまりのいきおいに私が一步ぶん後退する。

「サニニヤさんは同じウイツチで、同じ仲間なんです！　大切に決まつてるじやないですか！」

両手をぎゅっとぎつて雁淵さんが私の目を覗き込む。同時に私も雁淵さんの目が見えた。

あれは嘘をついているような目じやない。嘘にまみれた親の目を見たことがある私だからこそ、断言できた。

「とにかく休んでいてください！ 体調がよくないときは休まなきや！」

ぐいぐいと私の背中を押して雁淵さんが部屋の前まで連れて行く。さつきのショックが抜け切っていない私は抵抗する力もあるわけがなく、為されるがまま。

「なにかあつたらなんでも言つてくださいね！ 私にできることなら何でもしますから！」

雁淵さんが力いっぱい笑う。それはまだ新米ウイツチだとは思えないくらい頬もしくて、そして眩しい笑顔だった。

「寝ていてください。ちゃんと私が伝えておきますから」

部屋へ押し込まれるような形で入れられると雁淵さんがちよつと胸を張る。それは小さな体に似使わないほど大きくて、年下だとは思えないくらいだ。

「そう、しようかしら」

「そうしてください！」

私は卑怯者だ。私のことを気遣つて、笑つて立ち去る雁淵さんにすら本当のことを言

わないのだから。

なにも私は雁淵さんにあげられていない。それなのに彼女は私に厚意を向けてくれる。

これを卑怯と言わなくてなんと言えばいいのだろう。

だから私は醜い。卑怯だと理解しているのにも関わらず。

また私は繰り返している。

第11話 すおむす

スオムス基地は全体的に人が多い。501と502という2つの統合戦闘航空団しか見たことがないため、他に比べる基準がないけれど、この2つよりは人員に余裕があるようだ。

事実として墜落してしまった航空ウイッチ回収用の陸戦ウイッチの人員がいる。これはふたつの統合戦闘航空団にも見られなかつた。

人が多ければ、賑やかになる。それは施設にいたころも同じ。人が多ければいろんな音が出る。だから騒がしい。もちろん、楽しげな騒がしさは見ていて楽しいので私は嫌じやない。

そこの輪へ入つていくことはしないけれど。いつまでたつても私の対人恐怖症は治らない。昔よりもマシになつたとはいえ、いきなり見ず知らずの中へ割つて入つていくことは難しいことだつた。

でも私は端っこにいることは嫌いじやない。むしろひとりでのんびりとしているのが好きだ。一人のときはピアノを弾くことが好きな私だけど、ここにはピアノがないためにかをするわけでもなくぼんやりと考えに没頭することにした。

思えば移動ばかりしている。ガリア基地からスオムス基地に。そしてペテルブルクに行つてまたスオムス基地へ。その途中で502と大型ネウロイとの戦闘を盗聴したりしたけれど、おおむね平和に移動ができたと思う。いきなり雁淵さんが走り出した時はびっくりしたけれど。

大型ネウロイとの戦闘なんてそうぽんぽんと簡単に起きるものではないと思つていたけれど、まさか2回もこんな短期間で遭遇するとは思わなかつた。やつぱりネウロイはこの世界にかなりいるらしい。

「こкосオムスもかなりの激戦区のようでしょっちゅうネウロイと戦闘している。けれど、常に戦つてゐるわけではない。

警報が鳴らない時は和氣藹々としたもの。

「ああ！ またねーちゃんヴィーナで昼間から飲んだくれてるな！」

「はつはつは！ まだまだだな妹よ！ これは水！ ただ水を飲んでいるだけだ！」
「うそつけ！ うわつ、酒臭い！ やっぱりヴィーナだ！ アルコール度数35%を水とは言わないからな！」

……和氣藹々と、したもの。うん……。

ちなみにヴィーナというのはウオツカの種類のこと。そしてエイラが「ねーちゃん」と呼ぶアウロラさんはエイラの実姉ということになる。

姉妹喧嘩、というほどのものではないのだろう。だから和気藹々という表現は間違つていはない、はず。それにふたりとも本気で喧嘩しているわけじやないのはすぐにわかる。

だから安心して私も見ていた。エイラにお姉さんがいたのは初耳だつたけれど、仲はとてもいいみたいだ。

エイラは完全にからかわれているけれど、きつとそれが姉妹間のコミュニケーションなんだろう。姉妹はおろか、兄弟といえるものもいない私だからそういう関係はよくわからないけれど、エイラとアウロラさんはお互のこと大切に思つてているということはわかつた。

「ほれほれ、イツルも飲んでみろ！」

「未成年に飲まそとすんなあー！」

「ふふつ」

ちよつとおかしくなつてきた。口元を隠すために手をあてて笑うと、その声が聞こえたのかエイラとアウロラさんがこちらを向いた。

「サーニヤあ……見てないで何とかしてくれよ」

「えつと、でも……」

「まあ、こつちにおいて。私がいっぱい奢つてやるよー！」

「私が飲まないからといってサニーヤに飲まそようとすんなあー！」

大またにずんずんと酒瓶を片手に近づいてくるアウロラさんにしがみつく形でエイラがずるずると引きづられて来る。ほんのりとアウロラさんの頬が赤いのはアルコールのせいだろうか。

「わ、私は未成年ですから……」

「ふははは、未成年が水を飲んで何が悪い！ ほれほれ！」

「いーかげんにしろよねえちゃん！ サニーヤに絡むなあー！」

自由奔放だなあ、というのが私のアウロラさんに対する評価だ。口元が笑っているのは完全に妹をおちよくつて遊んでいる確かな証拠。

さすがにお酒はサニーヤの体である都合上、断つておかなくてはいけない。前だつたらちよつともらつていたかもしけないけれど、サニーヤの体がお酒に強いかわからないため下手な飲酒は避けた方がいい。

「すみません、まだお酒は……」

「何を言う！ 私がそれくらいのころはぐいぐいとだな！」

「それ、ねーちゃんだけだからな……」

エイラが胡乱な目つきで呆れたようにつぶやく。だけど正直、私から言わせて貰うのならどつちもどつちだと思う。

もちろんエイラが酒乱というつもりはない。だが変わっているという点ではどつちもどつちだ。変わっている、という表現は適切でないかもしれない。うまい言葉が思い浮かばないけれど、どれくらい「ぶつ飛んでいるか」という度合いにおいて似ていると思う。

聞いたところによるとアウロラさんはたつたひとりで無数のネウロイと渡り合い、撃退したほどの猛者らしい。一方でエイラはシールドを必要とせず、固有魔法の未来予知でネウロイのビームをことごとく回避してしまえるスーパーエース。

この姉妹はいつたいどういう育ち方をしてきたのか気になるところだつた。

「つたく、いつつもいつつも飲んだくれてばっかり……」

「おお、わが妹はずいぶんと辛辣だなあ。お姉ちゃんは悲しいよ。あんなに可愛らしかつた妹が……」

「んあ！ いつのまにアルバムなんて！」

「サーニヤ、見るだろ？」

……気になる。

今でこそエイラはちょっと男っぽい口調だけれど子供のころはどんなふうだったのかすごく興味がある。というかぜひ見てみたい

「その顔は気になる顔だな？ ほら、見てみればいい」

「ま、待て！ サーニヤ見ないでくれ！」

エイラ、ごめんね。

でも気になるの。子供の頃のエイラがいつたいどんなふうだったのか。サーニヤの小さな頃も気になるけれど、知る術がない。だからとりあえずアウロラさんがエイラを捕まえているうちにアルバムを開く。

「あー、あー、あー！」

「うるさい、イツル」

「ぐえええ！ ちよ、ねえちゃんギブギブギブ！」

姉妹仲のよさを目の前で見せ付けられながらアルバムを開く。さらにエイラの叫び声が大きくなつたがアウロラさんが締め上げる力を強めるときゅうと強制的に黙らせられた。

……わあ。

え、どうしよう。すつごくかわいい！

写真には幼いエイラがぼやつとした表情で写っていた。おそらくスオムス、つまり

フィンランドの民族衣装だろうと思われるものを身にまとっている。

他にもあどけない満面の笑顔をしたちつちやいエイラや、姉妹が並んで写っているものもある。

いいな、こういうのつて。

最初はちょっと興味があるから、くらいの感覚だつた。でも見ているうちにだんだんと羨望の思いが湧いてきた。

もしこんな姉妹がいたら楽しかつたんだろうか。もしこんな家族だつたら、私はどんなふうになつていたんだろうか。

少し考えかけて振り払う。こうだつたら、というイフを想像することは簡単だけれど、昔は変わらない。それは不毛なこと。きっとその想像は美しいけれど、どこまで行つても本物にはなれない。甘美で恍惚で、そして空虚。

だから私はアルバムを閉じた。

「ありがとうございます、アウロラさん」

「ん、どうだつた?」

「ちつちやいエイラ、かわいかつたです
「うう……サーニヤに見られた……」

今まで締め上げられていたエイラがようやく解放されると、萎れた青菜のようにエイラがぐつたりとへたりこんだ。

「かわいかつたかー。そうだろう、そうだろう。じゃあ、ここでイツルの子供の頃の話でもしようか！」

「ちよ、ねーちゃん！ やめろって！」

「ハッセ！」

「はいはい。イツル、ちよつとこつちに来ようか」

「ハッセ！？ う、うらぎりものーー!!」

パチン、とアウロラさんが指を鳴らすとどこからともなくハッセさんがやつてきた。ずるずるとエイラがハッセさんに引きずられてかなり離れたところまで連れて行かる。

やつぱりハッセさんとニパさんは似ているな、と思いながら羽交い絞めにされるエイラを見守る私の肩をアウロラさんが叩いた。

「ちよつといいかな？」

「はい？」

「何を隠している、サーニヤ・V・リトヴヤク」

「はい、なんて軽い気持ちで返事をした私を剣呑さが孕んだアウロラさんの一言が凍りつかせた。

「わ、私は隠し事なんて……」

「戦場で生き残るコツを教えてあげよう。色眼鏡を外した自分の目を信じることだ。そして私は君がなにか隠し事をしていると思った」

違うか、とアウロラさんの瞳が私に問いかける。あまりの気迫に私はただただ威圧されてしまつて、口が開けない。

背筋にぞくつと寒気が走る。脈拍が速くなり、口内がカラカラに渴く。

肉食獣に睨まれたウサギのように動けなくなつてゐる私をじつと見つめていたアウロラさんがなんの前触れもなく緊張を解いた。でもほつとすることができるわけもなく、私の足は竦んで棒立ちのまま。

「まあ、いい。君が敵でないことはわかっている。隠し事の内容はわからないが、私も妹イツルの交友関係に口を挟むほど野暮じやないつもりだ。だが覚えておくといい。過ぎた秘密は身を滅ぼす」

アウロラさんが私の肩を軽く叩く。そして私に一瞥もくれることなく去つていつた。あとには膝が笑つてしまつて動けない私だけ。

さんざんアルコール35%のヴィーナを飲んでいたはず。それなのに酔つ払いだとはとても思えなかつた。果たして酔つていたかどうかすら怪しい。

ただひたすらに圧倒された。足音が遠く離れてからようやく止まつていた呼吸が意味を成すようになる。

気づかれてはいない、のだろうか。たぶん気づかれていないはず。もし気づいたのなら追及しないわけがない。気まぐれそうな人だけれど、そこだけは確信できた。

だから落ち着け、私。今、変に弱みを見せてしまえばそれで気づかれる可能性もある。

仮にアウロラさんが追及しなくとも、ほかの人に違和感を持たれるべきじゃない。

ああ、そういえば今日は私が夜間哨戒のシフトだつたつけ。そんな現実逃避のために

無理やり思考を切り替える。

過ぎた秘密は身を滅ぼす。その一言が頭にこびり付き続けた。

第12話 えいら

久々の夜間飛行だ。最近はペテルブルクにいたせいでなかなか飛ぶ機会がなかつたけれど、スオムス基地に戻つてきた私はようやくひとりで飛ぶ機会を得た。

本当にラッキーだ。アウロラさんに言われたことをひとりで考へる時間が欲しかつたところにちょうどひとりで夜間哨戒をすることができたのだから。

私はどうするべきなんだろう。

サーニヤがこの体に戻つてくれるのが最上だ。けれどそこそこの月日が経つても戻つてくるような様子はない。反対に私が戻ればいいのかもしれないけれど、戻る方法があるなら初めからそうしている。

私は戻らなくてはいけない。もともとこの世界にいたわけではない異物が混じり続けてはいけないから。

けれど、どうすればいいんだろう。私にできることといえばこうしてサーニヤを演じることだけだ。

無理があることくらいわかってる。でも話してしまえば私もサーニヤも消えてしま

う。だから私は与えられたロールを延々と演じ続けるしかない。

正しくないことかもしれない。でも仕方ないじゃないか。私にはこれが精一杯なんだから。

どうがんばっても私もサーニャも戻れる方法が見つからない。この世界で生きていけば何か方法の糸口くらいは掴めるんじゃないかと思つた。けれど未だに収穫はない。

私は、どうするのが正解だつたんだろう。

真実を告げることも許されず、そして逃げることも許されない。そんな状況でこれ以上行動なんてないじやないか。

ああ、だめだ。そんなことを考えたいわけじゃないのにまた言い訳ばかり考えてしまつている。

もう今日はだめだ。こうなつてしまつたらまともに考えることなんてできない。せつかくひとりになれる機会だつたのに、それをみすみす棒に振つてしまつた。

そしてこれを続ければほぼ確実にネガティブな方向に思考が傾いていく。いつものことだからよくわかっている。こういう時はできるかぎり楽しいことを考えないと私が潰れる。

思い出せばこの世界も悪いことばかりじやなかつた。楽しいことがゼロだと言つたらそれはサーニャの周囲にいた人たちに失礼だ。

いい人たちばかりだつた。今までサニーヤが会つたことのある人は警戒したけれど、そうでない初対面の人はさほどサニーヤを演じようと必死になる必要がなかつた。だからそんな人たちと話すことはとても楽しかつたし、少しだけサニーヤでいなくてもいい時間だつた。

もちろん、会つたことのある人だつて話していく楽しい。アウロラさんはぞつとしたけれど、エイラと姉妹のやりとりをしている姿はとても微笑ましかつた。

そう、エイラだ。なんだかんだと言いつつ、ずっと一緒にいるけれど割と助かつていた。確かに私は一人でいるほうが好きだけれど、ずっとひとりでいるわけにもいかない。

そんな時にエイラがいるという事実はとても助かつた。この世界の知識もない私を導いてくれる存在はいないと困る。そしてエイラはお世話を焼きなのかよくサニーヤを気にかけている。おかげで助かつたことは何度もあつた。

どうしてかはわからない。だけど困っている時、エイラは真っ先に助けに来てくれる。

だからきつと。

また、助けに来てくれるんだろうな。

「ネウロイが接近中。数は一です」

『そう。じゃあ救援を……ああ、やる気に溢れた子が出てつたわ』

ネウロイはまだ気づいていない。だから私はずっと一定の距離を取りつつ、様子を見続けていた。そう、変なのだ。今までと比べてはるかにネウロイのサイズが小さい。だいたいサニーヤの体と変わらないくらいだ。

今まで遭遇してきた相手は軒並み巨大なものばかりだった。せいぜいであつた小型も大型ネウロイの子機みたいなものばかり。だから小型だけ、というのは初めてだつた。

「サニーヤああああああああ！」 無事なのかああああああ！

「え、エイラ。静かに」

「んおつと……」

勢いよく、というかもう勢いしかないんじやないかと思うくらいの速度を出したエイラが制動をかける。

「サニーヤ、ネウロイはどこだ？」

「あの雲の中に……」

「まだ撃つてないんだな？ じゃあ、先手必勝！」

喝を入れるようにエイラが叫ぶと、一気に速度を上げて私の教えた雲に向かつて突撃する。遅れないように私もエイラを追いかけて行く。

「そら、出て来い！」

あぶり出すためか、エイラが雲に向かつてまばらに機関銃を撃つ。撃ち出された鉛弾が雲霞を切り裂いていく。私が射程圏内に雲を納める頃には雲は散り散りになつて、覆い隠していたネウロイが姿を現した。

「えつ……そ、そんな……」

確かにネウロイは姿を現した。そしてそれはサニーヤの体を同じかそれより少し大きいからくらいのサイズだつた。そう、それだけなら私はなにも思わなかつた。ただいつものようにサニーヤの体に染み付いた動きに従つてフリーガーハマーを撃つていたはず。

ネウロイが人の形さえなければ。

「ちくしょう、人型だつて？」

エイラが毒づく。けれど速度を緩めることはなく、銃撃の手はさらに激しくなつていつた。

今まで遭遇してきたネウロイは悉く異形のものばかり。どこか機械的で無機質なその容貌を見たところで何とも思うことはなかつた。

でも今回は人の形をしていた。たしか人の形をしているだけ、と思うかもしけない。だけど私にとつては死活問題だ。

人の形をしているものは撃てない。

「サニニヤ、今だ！」

エイラが追いつめたのか私のフリーガーハマーを撃つように言つてくる。だが撃てるわけがない。

相手はネウロイだ。だから撃たなくちゃいけない。そう頭ではわかってる。でも理解していたところで私の指は動かない。サニニヤが撃てたとしても、私が拒否している。

「サニニヤ？ どうしたんだ！」

撃てるわけがない。それがネウロイであつたとしても、人の形をしている。それをこの手で撃つことはできない。

トリガーガードから指を外すことまではやつた。けれどトリガーを引くことができない。仮にも人の形をしたものを持つことにためらいがあつた。相手が撃つてきたのならまだ撃ち返せた。しかし人型ネウロイは私たちに対し攻撃することはなく、ただ避けているだけ。つまりほとんど無抵抗。それを一方的に攻撃するなんて。

それじゃあ、私の親だつた人たちと同じだ。

ネウロイは人類の敵。だから討たなくちゃいけない。理屈はわかるけれど、その理屈はサニニヤの世界のもの。私の世界じやない。

だから私はトリガーへ指をかけられなかつた。

「つ……来るなつて！」

エイラの機関銃が銃弾を人型ネウロイに向かつて吐き出す。すいすいと人型ネウロイはそれを回避した。

「なんで当たんないんだよ！」

苛立つたエイラが人型ネウロイを屠らんとマガジンを空にする勢いで連射する。固有魔法の未来予知も併用したエイラの十八番。だがそれを超えるレベルで人型ネウロイは回避行動を取つていく。

ぐるりぐるりと人型ネウロイが旋回する。そして急速に私たちから離れていった。

「深追いするのはやめとくか……」

エイラが銃口を下に向けてホバリング。ダイヤのエースが万全の状態で挑んで仕留め損ねた相手だ。迂闊に追いかけてとんだしつぺ返しを食らわないとも限らないと考えてたのだろう。

「帰ろう」

「うん……あの、ごめんな——」

「謝らなくていいから。な？」

それだけ言つて私には有無を言わさずエイラが基地へ方向を転換させた。同じよう

に私も向きを変えた。

私のせいで逃がしてしまった。だから気まずくて基地へ帰還するまで一言もエイラとは話せなかつた。

緩慢な動きでストライカーから足を抜いて、フリーガーハマーをいつもの定位置に。夜間哨戒だからまだ朝焼けは顔を見せたかどうかという時間だ。誰も彼もが起きてくる時間だけど私はこれからが就寝時間。

今日はエイラの部屋へ行く気が起きなかつた。だから私は自分の部屋で寝ることにした。

少し早めに目が覚めた。

いつも早く目が覚めてしまつた時は二度寝をするところだけれど、今日は睡魔が襲つてこない。2度、3度と寝返りをしてみたが眠りに落ちる様子がない時点で諦めた。

もそつと起き上がり服を着る。とりあえず早いけれど夕食にしよう。ちよつと重めに取れば夜間哨戒まで持つはず。夜食をこつそり確保して夜の空で食べてみるのもいいかもしだれない。

そんなことを考えつつ、手早く夕食をいただいてさて何を夜食に選ぼうかと考えてい

る時に、私の肩が叩かれた。

「なあ、ちよつと……時間、いいか？」

「ええ、エイラ。大丈夫よ」

肩を叩いたのはエイラだつた。こうして呼ばれるのは初めてじゃない。言われるがままにエイラに付いていくと、だんだんと人気のないところへ。そしてついに誰もいない倉庫の裏ついた。

「どうしたの、エイラ？」

オスムスは常に寒い。だから魔法力に守られているとはいっても寒いものは寒い。だからエイラがここに私を連れてきた意図が早く聞きたかった。

今回はなんだろう。結構、なんでもないことではエイラは私を呼んだりする。でもたいていはその内容が「星がきれいだつた」とかそういうものばかり。だからちよつと期待していたりもした。

けれど現実はまたも私の予想を裏切つた。

力チヤン、と金属的な音が冷たく、そして小さく響いた。私の視界の先に真っ黒い何かが唐突に現れる。

瞬時に私の体が凍りついた。

真っ黒のそれは拳銃だつた。エイラの手に握られた拳銃の銃口が私に向かはれていた。

た。

「お前は誰だ？」
エイラが感情を殺した眼で私を射貫く。

第13話 サイよなら

「エイ、ラ……？」

状況を頭が理解してくれるまでに数秒。突きつけられた拳銃と「お前は誰だ?」といふ一言から私の頭は想定しうる限りで最悪の理解を叩き返した。

サニヤじやないことに気づかれた。

ああ、これだけは。これだけはバレちやいけなかつたというのに。

とはいえ、まだ手段がないわけじやない。なによりエイラが完全に気づいたとは限らない。

「エイラ? 何を言つているのかわからぬわ。だから銃を下ろして」

「もう一度、聞くぞ。お前は誰だ?」

「どうして……」

「前から違和感はあつたんだ。でも昨日のこととて考えて、そして確信した。お前はサンヤじやない」

低い声でエイラが告げる。銃口はブレることなく私の頭部を照準し続けた。

「そんなことは……」

「作曲フランツ・リスト。愛の夢第2番ホ長調『私は死んだ』」

エイラが淡々と作曲者と曲名を言つた。そしてその曲名は私にも聞きなれたものだ。だつて私が好きな曲で、そしてこの世界に来た私がガリア基地で弾いた曲なんだから。「あの曲はサニーヤも弾いたことがあるんだ。だけど、あんなに激しい弾き方じやない。もつと大人しかつた」

あつ、と声が出かけた。久しぶりにピアノが弾けて有頂天になつてしまつていて、まつたく気づかなかつた。

弾きグセだ。

すっかり忘れていた。同じ曲でも弾く人によつて強弱の付け方から、タメの空け方、そして弾くテンポまで違う。表現の仕方は個々によつて大きく変わるものの。

人によつて弾き方が違うのは当然。つまりサニーヤと私の弾き方が違つて当たり前であつて。

だから私の最大の誤算はサニーヤが愛の夢2番をエイラの前で弾いた事があつたことだ。

そしてエイラがサニーヤの弾き方を覚えていたことだ。

「で、でも私は弾き方をちょっと変えてみただけで……」

「じゃあ昨日、なんで引き金を引けなかつたんだ?」

「あまり体調が……」

「そうじやない。サニーヤの二両親はオラーシャにいるんだ。そしてスオムスはオラーシャに近い。そこに現れたネウロイを逃がすことは二両親の安全を脅かす可能性があるので、撃つことを躊躇うはずがないんだ」

「つ……」

今度こそ私の言い訳がなくなつた。すっかり頭から消えていたサニーヤの二両親の存在。そうだ。サニーヤはご両親のことをとても大切に思つてゐるのはわかっている。ならばそのサニーヤが撃つことを躊躇うはずがない。

けれど私は躊躇つてしまつた。それが人の形をしてゐるがために。

間違つたことをしたつもりはない。私は抵抗しない人の形をしたもの撃つことが正しいとはとても思えないから。でもサニーヤとしては間違えた。

サニーヤは撃つことが正しかつた。そして私は撃つことが間違つていた。その決定的な両者の違いが露見してしまつた。

わかつていたはずなのに。私は私であつてサニーヤじやない。どれだけ私がサニーヤを演じたところで、演じられたサニーヤが本物になることはない。偽物がどれだけ本物になろうとしたところで紛い物以上のものにはなれない。

いづれは限界が来る。それをずつと先延ばしにしようとしてきた。けれどついにツ

ケを払わなくてはいけない時は来てしまった。

もう逃げ場はない。本当のことを言わなければエイラは納得してくれないだろう。けれど本当のこと、つまり今エイラが見ているサニーヤは私が演じる偽物だということを。

ただ、それは私とサニーヤの存在が消えてしまうことを意味する。

私は完全に追いつめられていた。逃げ場もない。かといって話すこともできない。取れる選択肢は私になかった。

「エイ、ラ……」

名前を呼ぶと、エイラの持つ銃口が揺れた。ほんの一瞬だけエイラは眼を閉じて何かを振り払うように頭を振るつた。

「なあ、なんでなにも言つてくれないんだよ。私が間違つてるつて言つてくれよ。サニーヤはサニーヤなんだつて言つてくれよ」

押し留められなくなつた銃口の振動が激しくなつていく。

「頼むからさ……なあ、サニーヤあ…………」

搾り出すような声でエイラが言いつつ、俯く。それはまるで縋るようで、そして祈るようだつた。自分が間違いなのだと。くだらない杞憂だと一蹴してくれと。

「エイラ……私は、私よ」

ガシャン、と地面に落ちた拳銃が虚しい音を立てる。エイラが取り落としたのだとわかつたその時にはエイラが私に抱き付いていた。

「ごめんな、サニーヤ。変なこと言つてごめんな。わけわかんないことで疑つてごめんな……」

謝り続けているエイラを前にも私の気分は落ち込んだままだつた。いいよ、氣にしてなんかいないから。そんな欺瞞ばかり並び立ててエイラをまるで慰めるような演技。

ああ、私はなんて嘘つきなんだろう。いや、嘘はついていない。私は私。そこに偽りはない。だけど私がやつたことは嘘をつくよりも最低の行為だ。

エイラは自分が間違つていると思つたがつていてる。けれど、膨れ上がつた疑念は拭えなかつた。だから強引な手段に訴えかけつつも、私がエイラを否定してくれることを待つていてる。私はそれをわかつた上で付け込んだ。

「そうだよな、サニーヤはサニーヤだもんな。な、サニーヤ」

「ええ……」

縋りつくようなエイラを突き放すこともできず、為されるがままに抱きつかれていた。本当のこと話をわけにはいかない。だからこれは仕方のないこと。そう、これが正解だ。

そう、私が割り切れる性格ならばどれだけよかつただろう。

エイラが苦しんだのはすべて私のせいだ。私がいたからこうなつた。私がサニニヤになつたりさえしなければ、エイラは悲しまずに済んだ。

「ほんとにごめんな。あんなことして」

だから謝らないでほしい。エイラは悪くない。悪いのはすべて私。私がいなければすべてうまくいっていたはず。

エイラが拳銃を拾い上げた。いつそのこと撃つてくれた方が気が楽だつたとすら思えてしまう。撃つたら当たるのはサニニヤの体。だからいけないことはわかつていても、何かに罰して欲しかつた。

「ごめんな、こんな寒いところに呼び出して。戻ろうか」

「先に戻つていて。私も後からいくから」

「……そう、だよな。うん。先に戻つてる」
さすがに気まずいからという理由を察してくれたのか、エイラが先に戻つていく。角をエイラが曲がつて、姿を消した。

「……どうして、こうなつちやうんだろうな」

背中を壁に預けてもたれると、そつと顔を手で覆つた。エイラは確かに気づいていた。それを嘘で塗りたくり、誤魔化したのは私だ。それが間違つていたことくらいはわ

かる。

じやあ、私はどうすればよかつたのだろう。正しいことを言えば私もサニーヤも消える。かといって欺瞞に満ちたあの行為が正しいことだとは思えない。

だとするならば私は初めから間違えていた。最初から間違えていたから、こんな歪みを生んでしまった。

私はきつと怠惰だつたんだ。

サニーヤを演じることに注力すべきじゃなかつた。私が真つ先にすべきことはどうして私がサニーヤになつてゐるかの原因を探すことだつた。それなのに私がやつたことはサニーヤを演じて誤魔化し続けること。

その後も原因を探る努力もすることなく、のうのうとサニーヤを演じるなんてことをしていた私を怠惰と言わずしてなんと言えばいいのだろう。

私は探さなくてはいけない。どうして私がサニーヤになつてゐるのか。その原因を。ぽつぽつ、と歩き始めた。どこを歩いているのかしつかりと認識することもなく、ただ呆然と。これがきつと見納めだつたから。夜間哨戒の前だからと名目をつけて夜食をいくらかいただくことを忘れない。

いつものようにハンガーへ。のろのろと緩慢な動きでゆっくりとストライカーヘと向かう。

ずっと私は甘え続けていた。あまりに周りの人たちがいい人すぎて、そこにいたいと思つてしまつた。

「騙し続けてごめんなさい」

サーニヤを頑なに演じ続けた。私は偽物なのに。私は私であつて、サーニヤではないとわかつていたはずなのに。それなのに周囲を騙してサーニヤであると偽つた。間違つていて決まつていてるのに。

「楽しい嘘に浸り続けてごめんなさい」

周囲を騙していた。その結果としてサーニヤとしていろんな人に接してもらつた。常にバレてしまふリスクと隣り合わせであつたけれども、この世界で楽しいことは多かつた。いろんな話をした。いろんな経験をした。

それが嘘であったことは承知していた。私はサーニヤを騙つていた。だからずつと嘘だ。私はずつと嘘に浸つていた。その嘘が楽しかつたから。ただそれだけで、私は嘘をつき通そうとした。

「居心地のいい嘘を振り払えなくてごめんなさい」

いつでも私は動き出しができた。本当のことが言えないまでも、原因を探ろうとする努力はできたはずだ。それなのに努力を怠つたのは嘘が居心地のいいものだつたからだ。あまりにも心地が良すぎた。

「ごめんなさい。ごめんなさい。私のせいで狂わせてしまってごめんなさい」

私がいなければこんなことにはならなかつた。私がいたからこうなつた。

フリー・ガーハマーを手に取りかけてやめた。長旅になることは必定。なら弾数の少ないフリー・ガーハマーより、機関銃を持っていった方がいい。マガジンを携行していればしばらくは持つはず。

「こんなことしてごめんなさい。でも、きつとサニヤを取り戻すから。だから許してください」

がらんとしたハンガーに声が反響した。持ち慣れない機関銃を手にすると、予備のマガジンもしつかりと確保。

ストライカーをそつと撫でてから足に装着した。目前には夜の闇がぽつかりと口を開けて私を待っている。

次にここへ戻る時、私はもういない。私じやなくてサニヤになつてゐる。それまで戻らないと決めた。だから。

「さようなら」

第14話 ゆくえ

オスムス基地には戻らない。そう決めて私は基地を飛び出した。夜間哨戒として出て行つて、そのまま規定の時刻になつても戻らない。たつたそれだけ。無線機はちょっと申し訳ないけど壊した。私の場所を逆探知で探られて連れ戻される、なんてことがないとも限らない。

一見して無謀にも見える飛び出し。ううん、どこの誰が見ても無謀以外の言葉は思いつかないはず。かくいう私も無謀でなかつたとはちょっと言いきれない。

けれどなんの勝算もないわけじやない。もしかしたら、という可能性がなければ飛び出したりなんかしない。

私には『私の記憶』と一部の『サニヤの記憶』がある。その中でサニヤにゆかりが深くあつて行つていなない場所がひとつだけあつた。

サニヤの旧家だ。

オストマルク、つまりオーストリアに幼少期からサニヤは住んでいた。ご両親が音楽関係のお仕事をなさつていたようなので、そのゆえもあつてだと思う。とにかく、オラーシャで生まれたサニヤはオストマルクのウイーンにずっと住んで

いた。ならそこに家がある。そこがおそらくサーニャの今までの生涯においていちばん長く住んでいて、いちばん思い入れのあるおうち。

どうやらネウロイとの戦闘で放棄されてしまったようなのでかなり荒れていることが予想されるけれど、その場所にさえ行ければいい。私は知らなくともサーニャが知っているからウイーンにさえ到着すればたどり着けるはず。

サーニャの記憶はサーニャに関連するものや人と接触することで私も認識できるようになっていた。それならば私がするべきなのは現状で認識できるサーニャの記憶を頼りに、縁のある場所を巡ること。

ずっとサーニャの周りに甘え続けた。もうそろそろ自分から動いて見つけなくちゃいけない。

ここからウイーンまでだとちょっとかかるかもしれない。それでも私は行かなくちゃ。

途中で見つかったら台無し。だから敵味方識別装置は切つた。その他にも私の位置を辿れそうな機器類もすべて停止。

幸いなことに私にはサーニャの固有魔法がある。これで周囲は常に探れるから問題はない。魔法を使いつぱなしにすることは魔法力を消耗するだろうけれど、サーニャの固有魔法は燃費がわりといいからなんとなる、はず。

ここから何日かかるだろう。道中でネウロイに遭遇すると軍関係に発見されるリスクが高まるからかなり迂回しながら行かなくちゃいけない。

目指すはウイーンにあるサニーヤの旧家。なんとしてもサニーヤに私がなることになつた原因を見つけなくては。もしも見つかなければ次はサニーヤの生まれた家。それでもだめならサニーヤのご両親を探す。とにかく思いつく限りでサニーヤに関わりのあるものを徹底的に探そう。

どうして私がサニーヤになつたのか。その原因を見つけるまでは帰れない。これ以上、エイラを苦しませてはだめだから。

適当に選んで借りてきた機関銃をしつかりと掴み直す。そして掴み直して気づいた。これ、エイラのだ。

無意識に選んでいたなんて、不思議なこともあるものだ。でもきちんと動いてくれることは知っている。エイラには悪いけれど借りていこう。

「ちゃんとサーニャを取り戻すから。だからそれまでお願ひ」

そつとバレルを撫でてやると、私は前を向いた。まだまだ深夜。曉にはほど遠い。

「リトヴァク中尉が戦闘中行方不明です！」

その叫び声に私の体は固まつた。けれど想像以上の衝撃とかはなかつたし、額面通りの驚愕は作つたけど、本心はさほど驚いていなかつた。

「まだ戦闘中とは決まっていないだろう！ 通信は？」

「応答ありません！ レーダーの反応もです！」

スオムス基地内に怒号が飛び交う。レーダーに写らない？ 通信に応答がない？ そりやそうだ。本気でサニーヤが行方をくらまそうと思ったのなら、それくらい気を回さないわけがない。私だつてそうする。それにサニーヤには固有魔法がある。方角だつて索敵だつて機器類に頼らなくつたつてそれだけで事足りる。

「やけに落ち着いてるね、イツル」

「……まさか。ちょっと感覚が追いついてないんだ」

「それもそうか。うん、ごめんよ」

咄嗟についた私の嘘は通じたようで、ハッセはすぐに引いた。私に気を使つてゐるの

かもしだれない。

あればサニーヤなのか。それとも別の何かなのか。それはわからない。いや、もうどつちでもいいのかもしだれない。

サニーヤがいなくなつた。事実は変わらない。

「エイラ・イルマタル・ユーティライネン少尉。少しいいか？」

「……うん」

やつぱり私に話を聞きに来るよな。まあ、サニーヤと交友関係が深かつたのは私だから至極当然だ。

「なぜか少尉の機関銃をリトヴァク中尉は持つて行つている。心当たりは？」

この聞き方ですぐにピンときた。すでにサニーヤは逃亡を疑われている。そりや、私の機関銃なんて持つていつたら当然だ。しかも無断だしな。

「貸したんだ。機関銃の方がフリーガーハマーと比べて取り回しがいいから」

まつたく。もつとそういうのはうまくやれよ。

せつかく跡を消す方法は完璧にできているのに脇が甘いんだ。なんで私の機関銃を持つていつちやうかな。変な疑いを持たれるに決まつてるだろ。そこはちゃんと自分のフリーガーハマーを持つていくべきだつてのにさ。

……本当に、なんでだよ。

「上に一言もなしに貸し借りか」

「なんだよ。別にいいだろ」

「……次は気をつけるように」

たつたそれだけの短い注意で私の呼び出しもどきは終わつた。それ以上に言つてくることはない。存外にあつけないものだなと思うけれど、つつこまれても面倒だからよしとしよう。

「終わつたかい、イツル？」

「終わつたよ、ハツセ。ま、事務的つて感じだな」

「サーニャさん、心配だね」

「……そう、だな」

ハツセは本当に心配そうだ。私も外向きとして心配のふりはするけれど、戦闘中行方不明じやないことはわかっているからそこまでじやなかつた。

サーニャはネウロイに落とされてなんかいない。普通に生きているし、もしかしたら普通に空を飛んでいるかもしねれない。

ただ私たちの前から姿を消しただけだ。

「上はてんやわんやしてゐるらしいね」

「ナイトウイツチがいなくなつたからか？」

ハッセが言うところの「てんやわんや」はナイトウイツチが少ないからだろうな。夜間哨戒を専門とするウイツチは貴重だ。

「違う違う。サニーヤさんはオラーシャ陸軍の所属でしょ？ それがスオムス空軍管轄の基地でいなくなつた。逃亡なのか撃墜なのか。はたまた機器類の不調による行方不明なのか。これだけで上の話し合いの席が大きく変わるからね」

「そういうことかよ……」

どつちが有責か。それを話す場でサニーヤが逃亡したのか撃墜されたのかは争点として重要視される。だからさつき私に機関銃のことを聞きに来たのかもしれない。

くだらない。上のごたごたなんて私にとつてはどうでもいい。

サニーヤの行方だつてどうでもいいのかかもしれない。だつて私はこんなにも無関心だ。

これはサニーヤが選んだこと。他の人は知らなくとも私は知つていて。そしてサニーヤが自分の考えを持つて選んだことなら私に口を出す権利なんてない。そう、口を出す権利なんてないんだ。私なんかには。

「ハッセ、少し用事があるから」

「ん、そうかい。じゃあね、イツル」

たぶんハッセには嘘だとばれていた。でも追及しなかつたのはわざとなんだろう。

今はその気づかいがありがたかつた。

「ごめんな、サーニャ……」

私がサーニャを追い詰めた。そして私がサーニャに動かざるを得ない理由を押し付けてしまった。

すべては拳銃を突きつけたあの一瞬が。

結局のところ、私は引き金を引かなかつた。引けなかつた。けれど鉛弾なんかよりもずっとサーニャに突き刺さる弾丸の引き金を私は引いてしまつた。

「ほんと、なにやつてるんだろうな……」

何もしなければ変わらなかつた。サーニャは今日も控えめで穏やかに笑いながらここにいたはずなのに。

私が余計なことをしたばっかりにサーニャの居場所を奪つた。

全部が私のせい。そう、私が悪い。そのはずなのに。

「なんで間違つたことはしてないと思つちやうんだよ……！」

苛立ちに任せて壁に拳を叩きつけた。びりびりと痛覚が拳から二の腕まで伝播する。

サーニャが出て行く原因を作つたのは紛れもなく私だ。それは拳銃を突きつけたその日にサーニャが行方をくらましたことからもわかりきつてゐる。

確かに拳銃を突きつけたのはやりすぎだつたかもしれない。だとしても、確認せずに

はいられなかつた。

今でも靄は晴れていない。結局のところ私が「サニー」やと呼ぶあの人物は果たしてサニーナのか、それとも別の誰かなのか。

たぶん、だから私は間違つたことをしていいと思っている。

でもその一方でこうも考えてしまう。もし拳銃なんて持ち出さなければ。もし浮かんだ疑念を胸にそつとしまつてさえおけば。そうすれば何も変わらずに済んだんじやないか。

そんなふたつのまったく相容れない考えが私の中で同居していた。どつちが正しかつたのか、それともどちらも間違つていたのか。

「どうすりやいいんだよ……」

つぶやいてはみるけれど、どうするべきかなんてわかりきつてる。私は口をつぐんでしゃべらない。下手なことを言えばサニーの立場が悪くなる。

だから黙つて待つだけしかできない。きっとサニーは戻つてきてくれる。そう信じて。

第15話 かくご／カクゴ

ウイーンを目指してすでに3日が過ぎた。まだまだ目的地には着きそうにない。たぶん、一直線にウイーンを目指していたらきっとこんなにも時間は必要としなかつた。だけど私は時間をかけなくてはいけない理由がある。

まず、ネウロイと戦闘するわけにはいかなかつた。そのためにネウロイと遭遇することを避けた。ネウロイとの戦闘に慣れていない私が交戦するべきじやないという理由がひとつ。

そしてもうひとつは他のウイツチと会つてしまふかもしれないこと。もしウイツチと会つてしまつたら、スオムス基地に連れ戻されてしまうかもしれない。連れ戻されてしまつたら、サニヤを探す旅が続けられなくなつてしまふ。だから迂闊にウイツチと話すことはできないし、軍関係の施設や人に近づくわけにもいかない。

普通ならレーダーを切つた状態でネウロイやウイツチの接近に気づくことはできない。でも私にはサニヤの固有魔法がある。

魔導波でネウロイやウイツチの接近は察知できる。そして少しでも反応があつたらその場からすぐに離れる。そのたびに迂回路を取らなくちゃいけなかつたけれど、仕方

がない。

どちらかといえばウイットよりネウロイの方が遭遇回数は多かつた。というか哨戒中のウイットを捉えた一回を除いて、あとはすべてネウロイばかりだった。

そのたびに迂回してを続けたせいでウイーンへの道のりはまだまだある。今の私の位置はだいたい把握しているけれど、用意してきた地図に照らし合わせても、もうちよつと先。

だからもうしばらく空の旅は続く。たまに地上に降りて休息を取っているからずつと飛びっぱなしというわけではないけれど。空を飛ぶことが楽しくてもさすがにずっと飛んでいるのでは疲れてしまう。長距離の飛行になることはわかつていたから、ちゃんと休みを入れて居眠り運転ならぬ居眠り飛行だけはやらないように。

今さらになつて無謀だつたと強く思い始めた。だけど引き返すつもりはない。引き返してサーニヤが取り戻せるのなら喜んで戻るけれど、そんなわけはないことくらいわかっている。

もう引き返せない。私に示されている道はまつすぐに進むだけ。戻ることも停滞も許されない。

けれどそれを覚悟した上で私は単身で基地を飛び出している。

ただひたすらに前へ。とにかくどんなものでもいいからサーニヤを取り戻す手がかかる。

りを。それだけを求めて私は旅を始めた。ならその終わりはサニーヤがこの体に戻ること。それ以外はありえない。

サニーヤを取り戻す。そのためならばなんだってやる。いや、私はやらなくてはいけない。サニーヤの体に入つてしまつた者の責任として。サニーヤの体を間借りしてい る身として。

絶対にサニーヤを取り戻してみせる。そのためにまずはウイーンにあるサニーヤの旧家へ。サニーヤの旧家で取り戻すことができなくとも、なにか手がかりくらいは見つけてみせる。それがたとえどんなに小さなものだつたとしても、せめて次の目的地に繫がるものを。

「しばらくは、よろしくね」

ストライカーに話しかけても返事をしてくれるわけじゃない。そんなことはわかつて いるけれど、長い付き合いになりそだから労わる気持ちで話しかけた。

一直線にウイーンへ向かいたいところだけれど、慎重には慎重を期して遠回り。時間はかかるかもしれないけれど、途中でウイツチやネウロイと会つてしまふよりはずつといい。

あと3日はどれだけうまくいつてもかかると思う。目測だけれど、地図で見た感じス オムスからウイーンまでまだ半分行つたか行つてないかくらい。だから最短でも3日。

でもきつともうちょっとかかるはず。ここまでではまだネウロイの少ない地域だつたけれど、この先はネウロイ勢力圏内に踏み込むことになる。ネウロイの数はもつと増えることになるだろうし、もつと迂回を余儀なくされると思う。運が悪ければ戦闘も避けられないかもしない。

できれば戦いたくないな、というのが私の本心。サニーヤが手だれだつたとしても私はぜんぜん戦闘という行為に慣れてない。もしも戦闘になつて2体目のネウロイが来た、なんてことがあつたらサニーヤを探すどころか撃墜すらもありえてしまう。それは本末転倒だ。

こればっかりは常にサニーヤの固有魔法に気を使つて警戒を続けるしかない。なにか反応を返す物体があつたらすぐに方向転換。そうでもしなければきつとネウロイに襲われる。

だけど固有魔法を常時発動させつつ、ストライカーで飛び続けるなんてことをしたら、すぐに魔力が尽きてしまう。だからきちんと休憩は取らなくちゃいけないし、場合によつては眠らなくちゃいけない。でも、一口に休むといつてもネウロイに襲われる可能性を孕んだ状態ではゆっくり休むこともできない。

とにかく身を隠して薄く固有魔法の魔導波で周囲警戒を怠らない。ここまでやつてようやく。でも休まないとウイーンまで辿り着けない。

まだまだ私の旅は長くなりそうだつた。

3日過ぎた。だけど私の元にサニーヤについての情報はまつたくと言つていいくらい来なかつた。どうやら捜索隊を出そうかという話までは行つたようだけれど、サニヤがどこへ向かつたのかわからないから、どこへ出せばいいかもわからないまま停滞しているらしい。

たぶん、考えられる候補はすでに潰した後だ。サニーヤが行きそだと思われる場所としてぱつと思いつくのは最近いたペテルブルク基地だろうか。でも成果はないようだし、ペテルブルクにはいないんだろう。

どこ行こうとしてんだよ、サニーヤ。

元ストライクウィッチャーズのところにはすでに連絡が回つたと見ていいはず。でも

なんの報せもないことはミーナ中佐たちのいるサントロン基地も、リーネやツンツンメガネのところにもいない。ロマーニヤのシャーリーやルッキーニもたぶん外れ。扶桑の宮藤や少佐んとは遠すぎるから論外。

そうなると本当にどこを目指してサーニャが飛び出したのかわからない。サーニャはなんのあてもなく飛び出すようなタイプじやない。追い詰めておいてどの口がつて我ながら思うけれど、サーニャは何か考えを持つて行動している。

「ま、それがわかんないんじや意味ないよな……」

わかれれば苦労していない。きっとこんな軌轍を生むようなこともなかつた。

悔いても仕方ないことだと理解していくも後悔してしまうのは浅ましいとしか思えなかつた。

「よ、妹よ。辛氣臭い顔をしてるじゃないかな?」

「……悪いけど今はちょっとねーちゃんの相手するのはバスな」

「おっと、イツルは冷たいね。いや、拗ねてるね、か」

ぐいぐいとねーちゃんがヴィーナの瓶を傾けてあおる。いつも飲んでよく飽きないな、ほんとに。そんなことを片隅でぼんやりと考える。

「イツルも飲むか?」

「だから未成年に飲ますなって」

「別に変なことでもないだろう。寒い時は軽くアルコールを入れる。子供でもすることだ」

確かにスオムスは寒い。だからちょっとキツめのアルコール飲料を私も体を温める目的で飲んだことは何度もある。もちろん量は飲まないけれど、ねーちゃんの言う通りで子供でも酒は飲むこともある。

でも今はとてもじやないけれど、アルコールを摂取したいとは思えなかつた。

「気分じやないんだ」

「ああ、知つてる。いつまでガキみたいに不貞腐れてるつもりだとおちよくりに来たんだからな」

「飲みの肴になつてなによりだよ」

「……本当につまらなくなつたな、イツル」

キユポン、とねーちゃんがヴィーナの瓶から口を離しつつ、私を目線で射抜く。この程度で気圧されたりはしないから、私も負けじとにらみ返した。

「いつまでサニーヤのことでいじけるつもりだ？」

「いじけてなんかいない」

「嘘は悪いものじやないが、私は自分を殺すための嘘が大嫌いなんだ。イツル、その嘘はどうちだ？ 別に私に言えというつもりはないさ。だから自分に突きつけろ」

どつちだ、か。そんなのわかりきつてはいるんだ。だけど言葉にすることがいやだ。言葉という形にしたくない。

「わかっているんだろ、イツル。ごまかしは長く続かない。それが自分を偽るものならなおさら」

ああ、まつたく。その通りだよ、ねーちゃん。

確かに長く続かなかつた。私も、そしてサーニヤも。

けどもう、どうだつていい。サーニヤが本物かどうかなんて悩まなくてよかつた。変わらないことを当たり前と思っていた。だけどサーニヤだつて人間だ。何かのきっかけで変わることもあるかもしれない。

それに変わつたところでサーニヤはサーニヤだ。私は今のサーニヤがキレイなわけじゃない。なら別になんだつていい。ただサーニヤがいてくれれば。

これでお別れなんて認めるもんか。

「ねーちゃん、それちよつともらうからな」

ヴィーナの瓶をねーちゃんの手からひつたくるようにして奪うとぐいっと飲んだ。

喉元から胃の腑まで焼けるような感覚が落ちていく。

「さすが我が妹。いい飲みっぷりだ！」

「勘違いすんなよ。別に酒なんて好きじゃないからな」

手の甲でぐいっと口元を拭いながら押し付けるようにヴィーナを突き返す。一口でこんなものは十分だ。それに酔つてなんかいられない。

「さて、妹よ。お姉ちゃんの出番は？」

「あるわけないだろ。もう終わつたよ。こつから先は私の出番だ」

「そうか。じゃあやつてみろ。手は出さないから」

「出されてたまるもんか！　これは私がやるんだ」

べつと舌を出してねーちゃんに背を向ける。背後で小さく笑つたような声がした。

見てろよ。私だつてエースだ。背中は押されたけれど、それ以上は必要ない。

どんなことがあろうと私はサニーヤに話を聞きに行く。言わなきやわからないし、言

わなきや伝わらない。だから私がどう思つているか伝えるんだ。ちゃんと顔を合わせ

て。

サニーヤが残していくフリーガーハマーに手を触れた。サニーヤはどこにいるか。

どこへ向かつているか。

「ま、だめで元々だつ！」

えいやつと意識を集中。同時に固有魔法を発動した。

未来予知。これがどこまで通じるかわからぬ。相手の位置や行動が予知できるこの魔法でサニーヤを探ろうとしたつて、数秒先では情報として心もとないし、なにより

対象が目の前にいない状況下で発動したのは初めてだ。

正直に言つて固有魔法がうまくいく自信なんてまつたくなかつた。今まで挑戦したことはなかつたことだし、対象が目の前にいないから見たい未来の固定化が厳しい。

けれど、視えた。

なぜか数秒先の近未来だけではなくて数日後までが。

「ツ！」

いきなり大量の情報を頭に叩き込まれたせいで、無理が祟つたのか猛烈な痛みが走つた。だけど、そんな痛覚が陳腐なものに思えるくらい私が見た未来は衝撃的だった。

サーニャの行く先はウイーンだとわかつた。道中までは急激に詰め込まれた情報量に頭が付いてこれなかつたせいではつきりとわからぬけれど、目的地がわかつたのは大きい。

でもそれ以上に私が衝撃を受けたのは。

「サーニャが危ない！」

サーニャがウイーンの旧市街地でたつたひとり、ネウロイに取り囲まれている映像だつた。

だからなんだろうか。私の中で覚悟が固まつた。

「サーニャを助けるんだ。絶対に！」

第16話 おすとまるく

気づかぬうちに一週間以上が経つていた。急ぎたい気持ちは山々だつたけれど、ネウロイの勢力圏に入つたせいか、以前よりもネウロイとの遭遇率が上がつてしまつた。

考えてみれば当然だと思う。ここはネウロイの勢力圏という文字通り、ネウロイが勢力を誇つているエリア。人類側の手が届かず、ネウロイが跳梁跋扈している領域にいれば、ネウロイと多く遭遇することになるのは必然だ。

でもネウロイの遭遇率に反比例して哨戒などをしているウイツチとの遭遇率は減つた。これも当然のことでの、わざわざなんの用意もすることなくネウロイの勢力圏へ来たがるような人はいないということだろう。

そういう意味で私はこの世界の人から見たらかなりの物好き、いやかなりの自殺志願者に見えるのかもしれない。話の通じない敵がうようよといふエリアに武装しているとはいえ、単身で乗り込んでいるのだから。

ああ、それにしても本当にエイラの機関銃を借りてきてよかつた。いや、盗んだんじやないかと思われても言い訳できないか。とにかくフリー・ガーハマーを素直に持つ

てこなくて正解だつた。

「えいつ！」

機関銃から鉛弾が吐き出される。その弾道が描く先には小型のネウロイ。銃弾がネウロイを貫くと、破片をばら撒きながらネウロイが粉碎した。

「ふう……」

サニーヤの固有魔法はとても便利だ。事前にネウロイの接近に気づける。だけど接近に気づけたとしても、避けられない場合はどうしようもない。

例えば、どう迂回をしてもネウロイと遭遇してしまう場合。こうなつてしまつたら避けようがない。そういう時は一番、早く片付きそうなネウロイがどれかサニーヤの固有魔法を元に割り出して、できるかぎりすばやく倒してその空域を離脱するようにしてい る。

まさに今みたいに。そしてネウロイは倒し終わつたから、すぐにストライカーの出力をあげて全力で離脱しなくてはいけない。急がないと戦闘音に惹かれて、他のネウロイがやつてこないとも限らない。

ちよつと迂回する進路に切り替え。あとちよつとで到着するというところでもどかしきれど、背に腹は変えられない。他のネウロイが来てしまつたら大変、そのネウロイの相手をしなくてはいけなくなつ

てしまう。そしてそんなことを繰り返していたら延々とウイーンへは着かないし、私の体力も尽きてしまう。悪くすると、そのまま撃墜なんてこともあります。

撃墜なんてされたらサーニャを探す旅どころか、ここで死んでしまうかも知れない。仮に命が助かり、怪我もない撃墜という不幸中の幸いを逃れたとしても、ストライカーという移動の足を失つてしまうと、大きく旅に遅れが出ることになる。

そう、ようやく私がウイーンに到着したとしてもここでサーニャを取り戻せることは限らないのだから。

周囲に気を使いながらストライカーの高度をだんだんと下げる。幸いにもネウロイの反応はさつき撃墜させたものを最後に捉えていない。

座り込むような形で着陸。ちよつとストライカーをガリッと地面で擦つてしまつた。少し塗装が剥げてしまつたけれど、動きには問題なさそうだ。でもこれつて修理費はいくらくらいするんだろう。板金塗装とかつていくらかかるのかは知らないけれど、車を擦つて修理費で十数万とか聞いたことがあるし、もしかしてお高いんじゃ……

いやいや、きつとそんなことはない。それに戦闘を前提とするストライカーの塗装なんてしょっちゅう剥げてしまつているに決まつてる。少しくらい塗装が剥げたつて大丈夫、はず。

丈夫、だよね？

よくわからないけれど、これ以上を考えたところで答えがわかるわけでもなし。ストライカー自体の故障でないのなら、きっとなんとかなる。そう信じよう。

それより先に早くサニーヤの家に。

家に……。

「どこ？」

ウイーンは普通に広かつた。地図にサニーヤの家が書いているわけもないないし、足で探すしかない。

もしかしたらウイーンに着いた時点でサニーヤの記憶がうまい具合に戻つてきて家の位置がわかつたりしないか、なんて都合のいいことを考えていたけれど、物事はそういう上手く運んではくれないみたいだった。

ストライカーを担いで立ち上がり、歩き始める。もしかしたらここはサニーヤの家から遠いのかもしれない。近くに行けばサニーヤにとつて思い入れのある場所や、何度も歩いた道で思い出すかもしれないし、ぐるりと回つてみよう。

ウイーンといえば音楽の街、というイメージが私の中では真っ先に浮かぶけれど、ネウロイに襲われて放棄されてしまつたせいで、すっかり寂れてしまつていた。目につくものは廃墟ばかり。残念ながら華やかな街とは程遠い。

いつかきちんと栄えているウイーンにも行つてみたい。元の世界でウイーンに行けば音楽の街らしさを見る事ができるはずだし、サーニヤにこの体を返して私が元の体に戻ることができたのなら、行ってみるのもいいかもしない。

そんなことを考えながらあってもなしにふらふらとさまよい続けること数時間。頭の中に何か直感めいたものが突き抜けた。

ピタッと足を止める。そう、この道。私は知らないけれどサーニヤが知っている。私の中に残るサーニヤが懐かしさに声を上げている。

この感覚はきっとサーニヤの家にかなり近づいている証拠だ。ならばあとは感じたままに歩を進めていけば、そのうちサーニヤの家に着く。

ストライカーチを担いで、機関銃を背負つて歩く。違う道に出たら、すぐに引き返す。当たりのような感じがしたら、感覚を信じてその道を行く。そんなことの繰り返し。

こつちに表札という文化はないようで、どこもかしこも同じような廃墟にしか見えない。でものつぱりとした廃墟群の中にサーニヤの家がある。

廃墟じやなければ、こつちの建築とか見ごたえがあつたのかもなあ、と思ひながら探し回る。同じような場所をぐるぐると歩き続けて。

そして見つけた。

ここだ、という物的な証拠はない。ただ私の中に残るサーニヤの記憶、そして直感が

ここだと克明に告げて いる。

「お、お邪魔します……」

いや、今はサニーヤの体に入っているわけだから他人から見ればここは私の家みたいなものだし、そもそも誰もいない廃墟なのだから挨拶をする必要なんてないのだけれど、癖みたいなものでやつてしまつた。どのみち聞いている人もいるわけがないけれど。

鍵は掛かっていなかつたのか、それとも長期間にわたつて放置されていたせいか。ドアは開いていた。蝶番にもガタがきていたのか、軽く押しただけで狭かつた隙間が軋みながら広がつていく。

そこにはサニーヤ一家が暮らして いたであろう生活空間が広がつていた。ぱつと見てなんとなく高そ うだなあ、と思える家具が並んでいる部屋はホコリが積もつていて、ずっと人の手が入つていなことを窺わせる。

「あっ、これ……」

さつきまではここがサニーヤの家だと言える証拠は私の中に残るサニーヤの記憶のみだつた。だけど、暖炉の上でホコリをかぶつているそれが物的な証拠になつた。

それはごくごくありふれた写真立て。けれど、積もりに積もつたホコリを払うとひび割れたガラス越しに、小さなサニーヤとご両親らしい男性と女性が並んで写つていた。

ここがサニーヤの小さい頃に暮らした家。ほとんど廃墟になつてしまつてゐるけれど、それでもわざかながらに残つていた。音楽一家である証拠に立派だつたであろうピアノが鎮座していた。

ピアノの蓋を持ち上げて、鍵盤に触れてみる。鍵盤の加重がずしつと指にかかつた。だけど音はしない。弦が切れてしまつてゐるのだろうか。適当に鍵盤を連続して押していくけれど、錆びて朽ちたのか音がない。

椅子を引いて腰掛ける。ぎしつと軋んだけれど、幸いにも脚が折れて壊れるようなことはなかつた。サニーヤの体重が軽くてよかつた。もちろん、元の私が太つてゐるわけじゃないけれど。太つてゐるわけじゃないけれど！

とにかく。このピアノをサニーヤが弾いていた。きつとお父さまと一緒に連弾とかをしていたんだろう。

せつかくだから弾いてみよう。

もちろん、音が出るわけじやない。だけど、弾き慣れた曲だから頭の中で再生できる。もしかしたら弾くまねごとでもなにか思い出したりするかも知れない。

エイラに気づかれてしまうきつかけになつた曲だけど『愛の夢』は私のお気に入り。だからやつぱり咄嗟になにか弾こうと思うと、この曲を選んでしまう。でも今度こそ絶対に隠れたオーディエンスもいないから大丈夫。どのみち音が出ないのでから聞かれ

てもわかりはしないと思うけれど。

鍵盤が押されるたびに、こつこつと木と木がぶつかる音がする。ドレミの音はないけれど、テンポを刻む木の音が演奏だ。

エイラにはサーニヤより激しいと言われた私の演奏だけれど、なるほど確かに激しいのかもしない。こつこつと鍵盤が叩く音は静寂に満ちた部屋の中で嫌に明瞭に響いた。

いつものように穩やかな音トランクイロでフイニッシュ。もちろん、演奏しているわけではないから気持ちだけ。

弾き終わつた両手を膝へ。ふう、と一息をついた。やつぱり音が出なくなつてしまつてているのは寂しかつた。サーニヤのお父さんは音楽関係のお仕事をなさつていたようだから、きつといいピアノだつただろう。そんなピアノがこうなつてしまつたのだと思うと、素人だとしても悲しいものがあつた。

そして今さらながらになつて気づいた。サーニヤが戻つてきていない。

「ここは、外れ？」

正直に言つて、かなり期待していた。ここに来るまでの道中に相当な苦労を強いられたり、これでサーニヤを取り戻してエンドにできないかな、と考えていたりもした。

でも残念だけれど、サーニヤは戻つてきていないし、私が元の体に戻つてくれるよう

な様子はない。しかも悪いことにサニーヤの記憶の欠片が戻ってきてくれていな。

「（）まで来て……何もなし？」

急にここまで旅の疲れがどつと襲い掛かってきた。何かしらの成果があるのであればまだよかつた。でも苦労した割に得られた成果が何もなし。がつかりしてしまつても仕方がないことだと思う。

「はあ……」

腰から碎けてへたり込む。ぺたん、とついたお尻に冷たい地面が触れた。

次の手がかりを探すためにここをたたなきやいけない。それはきちんと理解しているつもりだ。

でも、成果なしはやつぱり疲れた。疲れだし、堪えた。

ここで少しくらい座つて小休止を入れることくらいは許してもらつてもいいと思う。ちよつとしたらまた動くから。だからサニーヤ、私を許して。

第17話 ジンリヨク／じんりょく

「だーかーらー！ サーニャがピンチだつて言つてんだろ！」

《だから、ちゃんと説明しなさいって言つたでしよう！》

私が叫ぶと、ミーナ中佐が何回も繰り返していたセリフを声高に言い返す。

《あのね、エイラさん。いきなりサーニャさんがピンチだから助けてくれ、なんて言われてもわからないでしよう？ 順序よく筋道を立てて説明しなさい》

「とは言つてもなあ……」

どう説明したものだろうか。未だに私はサーニャが飛び出した真意を完全に掴みきれていないし、そもそもどうして固有魔法の未来予知が数秒後の未来ではなくて、数日後の未来まで見せてくれたのかわかつていない。

「本当によくわからないんだ。ただサーニャはオストマルクのウイーンを目指してゐる。だけどあと幾日かでネウロイの集団に囲まれるんだよ！」

《あなたの固有魔法は知つてゐる。でもそれは数秒後でしよう？》

「だからよくわからないって言つたんだ」

ただ絶対に私の未来予知は当たる。それだけは確かだ。数日後まで見えたことは未だかつて起こらなかつたことだけれど、絶対に起ころる事象なのだ。

『駄目よ。サントロン基地のウイツチは動かせないわ』

「なんで！」

『証拠付けが弱すぎるからよ。そもそもウイーンにサニヤさんがいる確証はない。信じられるのはあなたの固有魔法だけ。過去に数日後を見たことがあり、その正確性が証明されているのならいいけれど、今回が初めてで、その未来予知が正しいかどうかわからぬ。そんな不確かなもののために部隊は動かないのよ』

ぐぐ、と言葉に詰まつた。ミーナ中佐が言つてはいることはどうしようもいくらい正しい。事実として私は未来予知を使つた。けれど未来を視たのは私だけ。他の誰かが視たわけじゃない。私の視た未来を保証してくれる人は誰もない。

むしろミーナ中佐は優しくらいだ。最初に話を聞いた時点で私が芝居を打つている嘘つきだと切つて捨てないだけ。

『わかつてちようだい。それだけでは部隊を動かすことはできないの。それが軍組織なのよ』

「…………ああ、十分わかつたよ」

サントロンの協力が得られないことは。

もしかしたらこうなるんじゃないかとわかつてていた話だ。むしろミーナ中佐は私の固有魔法を信じてくれている。ただ上を説得させる材料にはならないだけ。

『スオムスは動くのかしら?』

「これからな。到着は3日後。今から急いで行けばサニーヤがネウロイに囲まれた直後には間に合うはずだから」

『そう』

素つ気なくて短い返事と共にミーナ中佐は通信を切つた。もうちょっと何かあるんじゃないかとも思つたけれど、下手な応援は行動しないくせにどの口が、とならなくもない。あえて何か言うことを控えたんだろうと納得する。

「イツル、どうだつた?」

「ダメだつてさ」

「そつか。うん、まあしようがないね」

ハッセがなんとも潔くすっぱりと諦めをつける。ないものはない。それに期待することとは無意味だし、固執することは自滅を招く。

「ハッセ、そつちはどうだつた?」

「部隊長とスオムス一位のスーパーエースの太鼓判付きだからね。押し通したよ」「さつすがハッセ」

どうやつて司令を納得させてみせたのかはわからない。ただ、ハッセは上との折衷は任せて欲しいと豪語した。スオムス空軍がサーニャ救出作戦の実行を許可してくれないと、私自身も出撃してオストマルクのウイーンへ向かうことができない。どうせ上との掛け合いなんて経験なんてないんだ。任せてと言つてくれたハッセに頼るが吉。

「でもなんで協力する気になつたんだ？」

「まあ、イツルは仲間じやないか。それに協力するのは当然だし、あとは罪滅ぼしだよ」「なんかハッセはやつたか？」

私の記憶にあるかぎりでハッセが罪滅ぼしなんていう動機を持ち出す理由はない。なので疑問を覚えた。私に理由がないのならサーニャかと思つたけれど、ハッセにそこまでサーニャとの繋がりがあるとも思えない。

「ほら、いつだつたかイツルを羽交い絞めにしてアウロラさんとサーニャさんから引き離したの、覚えてる？」

「そーいや、そんなこともあつたな……」

「あれ、実はアウロラさんの指示なんだよね。ちょっとサーニャとふたりで話したいからって言われてさ。あれ以来、目に見えてサーニャさんの様子が変わつたし、ちょっとね。悪いことをしたような気がしてたんだ」

「ねーちゃん……」

すべての発端はねーちゃんかと思うと文句くらい言つてやろうかという気分になるけれど、こんなことを考えている私もサーニャを追いつめた側の同類だ。人のことは責め立てられない。

「サーニャさんがなんでスオムス基地を飛び出したのかはわからない。でも、もしかしたら私もそのきっかけを作つてしまつたのかもしれない。だから協力したい」

「助かるよ、ハッセ」

部隊長である以前にハッセの人望は相当なものだ。ハッセの一声で付いて来てくれるウイツチの数は増える。だから私にとつてハッセの協力は百万の味方を得たに等しい。

「さあ、行こうか……と言いたいけれどイツル、武器はどうするんだい？」

「あー、まいったなあ……」

私の武器であつた機関銃はサーニャが持つて行つてしまつてゐる。だからといつてなにも持たずに出撃したつて、何かできるわけがない。

「しょーがない、こいつにするか」

私が選んだのはフリーガーハマー。いつもサーニャが使つてゐる武器だ。空いているのはこれしか残つていないのでから仕方がない。使う自信はあまりないから、サブウェポン頼りになる。火力不足は否めないけれど、メインウェポンである機関銃がない

んだからどうしようもない。

「使える？」

「ハツセほどじやないけど、使つて見せるさ」

射撃のハンナ・ウインドと言われるくらいハツセは銃器類の取り扱いが上手い。この面において、仮にもスオムス一位と呼ばれている私もハツセに勝てない。ハツセが過去にフリーガーハマーを使つたことがあるかどうかは不明だけれど、対戦車ライフルまで使いこなすというのだからきつと使えるのだろう。

でも私だつて使えないわけじゃない。私だつてエースだ。無理のひとつやふたつごとき、押し通してみせる。単純な話、フリーガーハマーを手足のように操つて見せればいいだけだ。

「フリーガーハマーは重いよ？」

「サニニヤはずつとこいつを抱えて飛んでたんだ。ならできるさ」

こつん、とフリーガーハマーを叩く。硬質な感覚が手の平を押し返してくる。こいつはずつと夜間哨戒で飛んでいるサニニヤを支え続けた武器だ。その意は空飛ぶ鉄槌。名前に見合う活躍をすることでサニニヤを支えてきたのだから、サニニヤを助けに行く私に力を貸して、ネウロイに鉄槌を下してくれるはず。

「時間もないし、行こうか。準備は大丈夫かい、イツル」

「ああ。さつさと行こう」

ストライカーに脚を通じて魔力を注ぎ込む。そして大空へと速度をつけて飛び出した。後からハツセが飛び立ち、順々に他のウイッチも後に続く。

「いいかい、みんな！ 目指すはウイーンだ。道中にネウロイと遭遇すると思うけれど、時間をかけずに落としていくよ！ イツルの未来予知によるとサニーヤさんが襲撃されるのは3日後。飛ばしていくから遅れないで！」

「「「了解！」」」

声の揃つた返答に頬もしさを感じた。フリーガーハマーをしつかりと掴み直し、サブウェポンとして持ってきた短機関銃を確かめる。

絶対。絶対に助けに行くからな、サニーヤ。

オスムス空軍基地主導「アレクサンドラ・ウラジミーロヴナ・リトヴァク中尉捜索作戦」開始

「へくちつ」

くしやみで私のまどろみは覚めた。寝ちゃつていたんだと気づくために時間は余りかからない。

軽く座つて休むくらいのつもりだつたのに、眠つてしまつていたようだ。私が想像しているよりもはるかにスマスからウイーンへの旅路は疲労を蓄積させてしまつていたらしい。

「ん……んんーつ」

ぎゅーっと背筋を反らして伸びの運動。ずっと固い床で寝ていたせいで体が凝り固まつてしまつている。肩や首を回したり、足を伸ばしたりして全身をゆっくりと解きほぐす。

ひとしきりストレッチをすると、時間をかけて立ち上がる。急に立ち上ると私は立ちくらみを起こしやすいからいつものクセでゆっくりと立つたけれど、サニーヤは貧血気味だつたりするのかどうか。

さて、と。準備体操が終わつたところでそろそろ考えなくてはいけないことがある。ウイーンにあるサニーヤの旧家はどうやらあまり有用な手がかりになつてはくれなさそう。だけど諦めるわけにはいかない。次の目的地を定めて、サニーヤを元の体に戻す

ための手がかりを探さなくてはいけない。

持参してきた地図を開いてちょっとと考え込む。次はどこに行くべきだろうか。サニヤの縁があるそこなどといつたら、思いつくのはガリア基地だけれどあそこは今どうなっているのかわからない。それにずっと長い間、サニヤの体に入つてからガリア基地では過ごしたけれど、特にサニヤが戻るような気配はなかつた。

じやあ、ガリア基地以外で、ということになるのだけれど、思い当たる場所がそうなるとほとんど残つていらない。

やつぱりサニヤのご両親を探すしかない。

ただわかっているのはウラル山脈を越えなくてはいけないということだけ。オラーシヤ、つまりロシアにいるということはわかつているけれど、問題はロシアが広すぎるのこと。

まずサニヤのご両親を探す手がかりを見つけなくてはいけない。サニヤのご両親がサニヤを取り戻す手がかりかもしれないから、サニヤのご両親を探す手がかりを捜索する。

……なんだか頭がこんがらがつてきた。軽い気持ちでスオムス基地を飛び出したわけじやないけれど、ここまで大変だとは思わなかつた。

でも引き下がるつもりはない。この責任を果たさないと、私がサニヤの中に入つて

しまつたせいで傷つけた人に顔向けてできない。

「つ！」

そろそろ移動しようかと思つて苦戦しながらストライカーを装着する。瞬間、サニヤの固有魔法が発動した。

「ネウロイっ……」

サニヤの固有魔法が発動した瞬間、魔導波が周囲に放射される。ほとんど時差を開けずに魔導波がネウロイの反応を返した。

ざつと30はゆうに超えるであろう数を。

状況は1対30。しかも私は戦闘慣れしていないときている。どう考へても勝てるわけがない。明らかにネウロイたちは私に向かつて移動している。しかもわざわざ丁寧に包囲網まで形成している。選ぶは逃げの一手のみ。いちばん囲みの薄い場所を狙つて一点突破。

ここで死ぬことはできない。私は死んだところで悲しむ人なんていないけれど、サニヤは違う。

だから絶対に生き延びる。なにがなんでも。

第18話 さーにや

ビームが体を掠める。サニヤの感覚に身を委ねてシールドを張つて衝撃をいなすとロール。

トリガーガードから外した人差し指を引くと、エイラの機関銃から銃弾が私に向かつてビームを放つたネウロイに土砂降りがごとく降り注ぐ。

そのうちの何発かがコアを捉えたらしく、ネウロイが爆散した。

「はあっ、はあっ……」

一体、これでいくつめだろう。こうやつて交戦しては逃げようとするのだけれど、すぐには別の個体が攻撃してくるから対応せざるを得ない。

体感ではかなり長い間、ずっと戦っているような気がする。でもきつとまだたいした時間は流れていらないんだろう。

撃破した隙を狙つて離脱を試みる。だけど、またしても私の進路を塞ぐようにネウロイが立ちはだかり、ビームを放つ。

「つあう……」

急いでシールドを張つて一瞬だけ受けとピツチアツアップしてビームの軌道から外れ

る。直撃をシールドで防ぎ続けたら魔力がもたないし、私がもたない。

「来ないで」

がむしやらに機関銃を掃射するけれど、私の腕を嘲笑うようにネウロイは回避した。サニニヤの固有魔法をフルで使用することによつて敵の位置は見えなくとも把握できる。でも倒せるかどうかは別問題。

数体は仕留められたけれど、そのためには何発の弾を無駄にしたのか。すでにマガジンが2つも空になっていることが私の腕の未熟さを教えてくれている。

「あぐつ」

幾条ものビームが飛来し、急いで展開したシールドで受け止める。1発でも押し返されると同時に何発もきたのだからたまらない。

逃げ道を。とにかく退路を確保して逃げないと。このままやつても残弾を浪費し続けるだけ。たぶん、残弾をすべて使つてもこの場にいるネウロイの半分も落とす事はできない。

弾が切れたら次に切れるのはなんだろう。私の魔力？ それとも命？ どちらも遠慮したいけれど、その手段が私にない。

じりじりと死の袋小路へと追い込まれていくようだ。打てる手を次第に奪われていき、最後にはなす術がなくなっていく。

湧き上がる焦燥感と恐怖をサニーニヤの体に染み付いた反射的な衝動に従つて動き回ることで塗りつぶす。むちやくちやに飛び回つて狙いをつけられないようにする。

— 1 —

ネウロイの鳴き声、とでも言うのだろうか。甲高い音がネウロイから発されて私の鼓膜を揺らした。咄嗟に振り向く私の視界がネウロイの発する紅の光で覆われる。

怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い。
違う、戦え。でもどうやつて？

いやだ。死にたくない。死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない。

願つたところでなにも状況は変わらない。ネウロイはビームを放つ直前で、私に回避する余裕はない。

急いでシールドを張ろうと構える。けれど、反対側からも同時にビームが私を挟み込むようにして放たれたようだ。両側からの衝撃が私を押し潰しにかかる。

う……つあぐ……

奥歯を食いしばつて両側のビームを受け止めるため展開した2枚のシールドを維持する。けれどじりじりと押し込まれて肘が曲がっていく。

シールドを解除すればビームに焼かれて私は死ぬ。
でも解除しなくても自分のシールドに押し潰されて死ぬ。

どう転んでも逃げようがないのなら、いつそ苦しまずには済むビームで焼かれる方を選

ぼうか。時間をかけてプレスされていくより、一瞬で焼き尽くされた方が楽なはず。

張っていた肩肘を解いて、シールドへ注ぎ込んでいた魔力を減らしていく。ガリガリとネウロイのビームが硬度の足りなくなつたシールドを削り始めた。

「ごめんなさい。ああ、もう少しうまくやれればよかつたのに。

やつぱり、私は——

「さああああああにやあああああああああ！」

私の体が上空から勢いよく下降してきた何かに掴まれて急速に連れ去られた。さつきまで私がいた場所でネウロイのビーム同士が衝突しているところが後ろに見える。

どうして。ここはウイーンでスマッシュからずつと離れているのに。

「なんで……なんでここにいるの、エイラ？」

「そんなの後だ！ しつかり掴まつてろよ！」

私を抱えたままエイラはさらには急降下。ネウロイが私とエイラの後を追いかけるようになる。逃れるようにエイラはさらにピッチダウンを続け、ついには建物よりも高度が低くなつた。

「エイラ、ぶつかるつ……」

「へへん、甘く見んなよつ」

エイラが地面上にぶつかる前に機首上げ。ぐい、と私の体も持ち上がりつて通りを低空飛

行。後方でなにかがぶつかるような轟音はきつとネウロイが勢い余つて地面に衝突した音だ。

「サーニヤ、離すなよ。私も離さないから」

「えつ？」

「行くぞ！」

地面から5mくらいをエイラと共に飛び続ける。後ろから複数のネウロイが追い立ててくる。ビームがいくつも飛んでくるが、エイラは振り返らないで回避していく。

「当たるか！」

私を抱えたまま、上下左右にエイラが不規則な回避行動を取る。連続して飛んでくるビームは私とエイラを捉えられずに石畳をその熱量で溶かす。

町角を右へ曲がつて直進。ネウロイから放たれるビームを避けながら大通りを飛んでいく。

「え、エイラ！　ぶつかる！」

目の前にはそびえ立つ建造物たち。このまま直進すればぶつかるのに、エイラは旋回するような素振りも見せずにむしろ加速させていく。

「しつかり掴まつてろよ！」

エイラが体の向きを縦に。そのまま建物の隙間を突き進む。髪が硬質な建物を掠め

て背筋がぞくりと冷えた。隙間を抜けると同時にドスン！　と建物に衝撃が走つてビリビリと大気が震動する。

「ざまあみろ！」

「え、エイラ。でも……」

「げつ。サニニヤ、上昇するぞ！」

機首を上げて急上昇。直後に建物を貫通したビームがさつきまで私たちのいた場所を焼く。あと少し遅ければ私たちも焼かれたものたちの仲間入りをしていただろう。

どうしてエイラは背後を一切見ることなく避けることができるのか不思議だつたけれど、エイラがウイーンにいるという事実によつて錯乱していた頭がようやく落ち着いてきて思い出した。エイラの固有魔法は未来予知だ。見なくても視えるのだから問題ない。

「まだまだだ！」

次々と間を空けずに撃ち込まれるビームをエイラが未来予知で先読みしてコースから逸れることで回避をする。機首下げをしてただでさえの低空飛行からさらに高度を下げて飛行。手を伸ばせば地面に届きそうなくらいの低空でありながらも、墜落することはなく、まるでここはエイラの庭なんじやないかと錯覚するくらい自由自在にウインの街並みを飛び回る。

「つ！ エイラ、次の角は右にして」

「ん？ わかつた」

前方のT字路を右に曲がるコースで進んでいたエイラに懇願すると、エイラはあつさりと右へ進路を変える。内側の建物に衝突しないぎりぎりを進行して右折。

「ああ、左にネウロイいたのか……攻撃だけに未来予知を絞つてたから気づかなかつた」「ネウロイの場所は私が特定するわ」

「じゃあ攻撃コースと回避は任せろ！」

聞きたいことはある。だけど今は生き残ることが優先。だから鎌首を持ち上げた疑問は追いやつてストライカーの機関を吹かす。

「次、ライトロールな」

「グリッド30、12にF型ネウロイ」

「ピッチアップ2セコンド。それからレフトロールだ」

右に旋回すると機首を一瞬だけ上げて左に旋回。すぐに離脱して別の通りに移動したおかげでネウロイのビームは的外れな方向へ。

「サーニヤ」

「グリッド56、32にB型ネウロイよ。なに？」

「ちょっと信じてくれよな？」

ぐいっとエイラが強引に右方向へ私を連れてロール。目の前に紅の光を宿したネウロイが現れる。

「そつちにはネウロイが……」

「わかってる。だからこうするんだ！」

機首を上げて一気に急上昇。ずっと私を支えていた手をエイラが離して、フリーガーハマーを構えた。

「落ちろ！」

一発のロケット弾が私たちを追いかけようと上昇を始めたネウロイの速度を殺して空中で釘付けにする。止まってしまったネウロイの胴体に後続のネウロイたちが次々と衝突していく。

「ハツセ！ もう着いただろ！」

『もちろんさ、イツル！ みんな、やるよ！』

団子のように一ヶ所にまとまつたネウロイに多方面から同時に鉛弾の応酬が降り注ぐ。動きを阻害されて鈍っていたネウロイたちは為す術もなくコアを撃ち抜かれて破片へとその身を変えた。

『まだいるんだね、イツル』

「うじやうじやいるぞ」

『いいじゃないか、うじやうじや。撃墜スコアが稼げるし、スオムス一位の座も奪えるかもしれないし、ね』

「なら抜かれないように私も暴れるか。サニーヤ、私の銃を返してもらつていいか？」

「あ……これ。その、ごめんなさい」

「気にすんなつて」

私が無断で借りて行つた機関銃をエイラに返す。エイラが自身の機関銃をしつかりと掴んでスリングを肩にかけた。

「何も、言わないの？」

「別にいいんだ。サニーヤが何を隠してゐるかはわからないけど、それでもサニーヤがサニーヤであることは変わらないんだ」

「でもエイラは私のことを……」

「そうだなー。確かにサニーヤじゃないかもとは思つた。でもなんだろうと私にとつてはサニーヤなんだ」

わかるためにずいぶんと時間をかけちやつたけどな、とエイラがテレ半分、苦さ半分に笑う。

「ちやちやつと片付けて帰るか。サニーヤはこつち使つてくれ」

フリーガーハマーをエイラの手から受け取る。さつきまで持つていた機関銃と比べ

ると、はるかにこちらの方が重い。でも久しぶりの重さに安堵しているサニーヤがいた。

「さて、やるか……つと！」

ストライカーの出力をあげて戦線に加わろうとしたエイラをビームが掠めて行く手を封じる。未来予知で気づいたらしいエイラは直前で制動をかけたおかげで幸いにも直撃にならずに済んだ。

『イツル、数が増えた。これは想定内？』

「私が視たのはサニーヤがネウロイに囮まれてる光景までだ！ 数が増えるのは知らない」

『なら撤退時か……つ！ 全員、散開！』

ハツセさんが焦った声をあげる。スマス基地のウイッチたちが散った直後に、さつきまで彼女たちがいた場所を熱線が焼き払った。

『イツル、想定できるかぎりで最悪の状況だ。ある程度の増援は織り込んできたけど、この数はね』

「目的は果たしたから手薄なところを落として撤退、だろ。殿は私がやる」

『それすら許してくれるかわからないけどね』

エイラの通信機越しだけれど、聞こえてくる銃声やシールドでビームを受け止めた轟

音が戦闘の激しさを物語る。

「さあ、私を落としてみろ！ やれるもんなら、な！」

エイラが吼えると飛び出す。連續して放たれる幾条ものビームを最小限の動きのみで避けると銃撃。迂闊にもエイラに背を晒していたネウロイに風穴が穿たれる。やつぱりエースの称号を冠するだけあつてさすがの機動だ。けれど状況は好転しない。

エイラひとりだけでこの数を捌ききることができるわけじやない。戦闘隊長であるハツセさんも奮戦しているけれど、他のウイツチたちへの指揮に忙しい。

私にできることはない。魔力はまだ残っているけれど、スタミナが限界に近い。もうちょっとと休めばまた動けそうだけれど、すぐには難しい。

「つ！ サーニヤ、避けろ！」

「えっ？」

エイラの鋭い警告によつてようやく私は高速で突撃してくるネウロイの存在に気づいた。固有魔法を切るんじやなかつたと後悔しても遅い。

シールドを展開して受け止める。トラック同士の衝突事故もこれほどじやないと思えるくらいの凄まじい音を撒き散らしてネウロイは弾き飛ばされた。

一瞬は止められた。だけどこれは拮抗じやない。私のシールドが耐えられなかつた

から急いで私が逃げたために偶然うまくいつただけ。もう一度、同じことをされたら厳しい。

それを知つてか知らずか、再びネウロイが反転して私を捉えた。

「サーニヤ！」

刹那、銃声。

私に向かつて突撃姿勢を作つたネウロイが吹き飛ぶと、その体躯を煌めく破片に変えた。

撃つたのはエイラじやない。かといつてスオムス基地のウイッチたちでもなければ、

ハッセさんでもない。

『サニニヤさん、無事かしら？』

通信機に新しい声が割り込む。声の主には聞いたことのあるもの。

「ミーナ、中佐？」

『偶然にも近くを哨戒していたら、偶然にも友軍がネウロイと戦闘中で、戦況を見るに苦戦していた。なので、これよりミーナ・ディートリンデ・ヴィルゲ以下5名はスオムス空軍と協力し、敵性ネウロイ群を撃滅します』

第19話 わたし／ワタシ／私

「ミーナ中佐！ なんだよ、来てくれるんじゃないか！」

『だから偶然よ』

手短にミーナ中佐がそれだけを言うと、攻撃開始の指示を出した。ずっと遠くで、バルクホルン大尉が、ハルトマン中尉がネウロイを次々と屠り始める。

『イツル、機だ。置み掛けるよ！』

通信機越しにハッセさんが告げる。エイラがにやつと笑つた。

〔形勢逆転、だな〕

ぐるりとエイラは首を回すと銃把を掴みなおした。それを合図とするように各所でネウロイの破片が生まれては散つていく。

「どうして……どうしてあなたは来てしまうの？」
「サニニヤを助けに来た。そう言つただろ？」

私はニセモノだ。

私はサニニヤではなく、ただサニニヤの体にいるだけのマガイモノだ。
エイラはきつと気づいている。これはサニニヤでないことに。

でも。その上でエイラは私を助けに来ててくれた。

それがわからない。

「私を助けてもあなたは何も得をしないでしよう。なのに、どうして……」

「私は損得勘定でサニーヤを助けに来たんじゃない！」

エイラが激しい口調で私に告げた姿を見たのは初めてだ。だからこそ余計に私は混乱した。なんでそこまで必死になるのか。

「私はあなたに何もあげられない。あなたに私は助けてもらつてばかりなのに……」

「何かが欲しいわけじゃない！ 私はサニーヤに何かをもらいたいから一緒にいるんじやなくて、一緒にいたいから一緒にいるんだ！ 何かもらえなくたつて構うもんか！」

私はサニーヤと過ごす時間が楽しいし、サニーヤと話すと笑顔になれる。それだけいいんだ！ 見返りのためじやなくて、私がサニーヤのためにしたいからするんだ！」見返りなんていらない。そんなこと考えたこともなかつた。

何か得があるから人と人は関係を持つ。ずっとそう思つていた。私の親だつた人がそだつたし、「金ばかり吸うだけの穀潰し」と言われたこともある。

エイラにはいろんなところで助けてもらつた。それなのに私はなんのお返しもできていらない。

それでもいい。一緒にいたいだけだから。エイラはそう啖呵を切つた。

私には考えられないことだつた。けれどエイラは嘘をついていない。

——少しさは気づけた？

うん。ようやくわかつた気がする。そう『私』に向かつて答える。

見返りなんて必要じやなかつた。私に向けられていた温かさは、私から何かをもらうためじやなくてただ私に無償で向けられたもの。

それが好意。それが温かさ。

《イツル、そつちに大型が行つたよ！》

「サニニヤ、いけるか！」

「ええ！」

気づくのに何年の年月を要したんだろう。ここまでしてもらつてようやく気づくなんて遅すぎたのかもしれない。

——でも気づけた。でしょ？

そうだね。『私』の言つていたこともようやくわかつた。

人の好意に対価はいらない。無償の愛情というもの。その存在に。

申し訳なく思うのも悪い事じやない。でも謝罪をした後に言わなくちやいけないとがあつた。

「エイラ」

「ん？」

私が飛ぶ。エイラが飛ぶ。

私たちを射殺さんと空気を焼くビームをエイラの動きに合わせて避ける。ぐい、とエイラが機首をあげた。その後からは既にネウロイヘフリーガーハマーの狙いをつけた私が飛び出す。

「ありがとう」

エイラが笑った声がした気がする。それは照れ隠しのような色を見せながら私の鼓膜を揺らした。

フリーガーハマーから射出された口ケット弾が大型ネウロイに命中すると、装甲もろとも爆破して吹き飛ばす。

「コアかつくにん！」

エイラが短機関銃を構えて露出したコアに狙いをつける。けれど既にコア周辺の装甲は再生が始まっている。

「えいつ」

サーニヤがフリーガーハマーのトリガーに指をかける。飛んでいく弾の行方を見守ることなく、サイズを拡張させたシールドを張つてエイラごと自分の身を守った。

フリーガーハマーはコア周辺の装甲が再生してしまったのを防ぐため。そして敢えて

拡張したシールドにした理由はひとつ。

「さんきゅな、サニニヤ」

エイラが確実にネウロイを仕留められるようにするため。

エイラが鉛弾をばら撒くと同時にサニニヤは張つていたシールドを解いた。

「これで……終わり、だつ！」

ピシッ、と何かにヒビが入つた。それはサニニヤの視界の先、ネウロイのコア。入つた亀裂は徐々に徐々にその幅を広げ、コアの表面全体を覆っていく。

「碎けろおおおおつ」

続けてエイラが連射。サニニヤも追随するようにフリーガーハマーに残る最後の一発を放つ。堪えかねたようにネウロイの全身が悲鳴をあげ、ついに碎け散つた。

「よつしゃあ！」

『イツル、こつちもだいたい片付いたよ』

『こちらも終わつたわ。ハイデマリーさんが妙に乗り気だつたから早かつたわね』

「ありがとな、ミーナ中佐。ハッセも助かつた」

『この借りは大きいわよ』

地味に怖いミーナ隊長の一言にエイラの顔が引き攣る。まあ、安いもんだなど肩を竦めながらエイラが笑つた。

「ねえ、エイラ……これ、どういう状況なの？」

「どういうつて……サニヤがここまで一人で来て、ピンチだから助けに……？ 覚えてないのか？」

「なんとなくわかるんだけど、他人の行動を見ているみたいなの」

「つてことは……戻った、のか？」

「どういうこと？」

きよとん、とサニヤが首を傾ける。はは、と力の抜けた笑いをエイラは浮かべた。

「いや、私もわからない。でも、きっとそれがよかつたんだ。それをあのサニヤは望んだんだ」

「よくわからないわ」

サニヤが不思議そうにエイラを見つめた。なんでもない、とエイラが打ち消すように手を軽く振った。

私はよくわかんないけど、お前の中でうまくいったんだろ？ だからいなくなつちやつたんだよな？

なんでサニヤの中にいたのかはわからないし、どうして急に帰つてしまつたのかもわからない。

なあ、サニヤとして過ごしたのは楽しかつたか？

どこにいったのかわからぬけどさ、お前はちょっと抜けてるつていうか、詰めが甘いところあつたからさ。元気で、上手くやれよ。
……ま、もう少しくらいゆつくり話したかつたけどな。

チチチ、と聞きなれた小鳥のさえずりが聞こえる。閉じているまぶたの向こう側が明るいせいか、ぼんやりと光が映つた。

もうそろそろ朝になる。いい加減に起きないと。そうわかつていても、朝は大敵だ。特に低血圧の人間にとつては。

ああ、まだ眠いな。もうちょっとくらい寝ていても許されないかな。

けれど太陽はすでに朝だと私に教示していたし、それに続いたかのように、目覚まし時計が氣だるげに叫び始めた。未だに意識が完全に覚醒しない私は布団の下から手を伸ばしてそれを止める。

「うう、んん……」

まだ起き上がりたくない。でもそろそろ起きないといけない時間だ。いつまでも寝ているわけにはいかないし、朝食も作らなくてはいけない。

なんだかずいぶんと長い間、ずっと寝ていたような気がする。いつもと同じ時間しか寝ていないはずなのにどうしてだろう。寝ていたはずなのに、まるで空でも飛んでいたかのような高揚感がじんわりと全身を包んでいた。

上体を起こしてぐいーっと伸び。眠気の残る目元を拭おうと右手を持ち上げた。

「え……あれ？」

本当に何気ない動作のつもりだった。特に何かを意図したわけでもなく、まだ眠いから目を覚まさせてやろう、くらいのつもりのみ。

だからつつ、と瞳から流れ落ちる水滴に右手が濡れたことが一瞬、理解できなかつた。「これ、は……？」

当然、涙だ。それくらいはわかる。ただ何かわかつてもどうして涙が流れているのかその原因がわからない。

別にフラッシュバックがあつたわけでもない。フラッシュバックがあつたのであれば、涙だけでは済まない。それにフラッシュバックにしてはこう、なんと言うのか。まったく苦しい感じがしない。むしろ心地良さすらあつた。

夢、だつたのだろうか。でもどんな夢だつたのかはまったく思い出せない。とても長

い、長い夢だった。漠然とそんな気がする。

「どんな夢、だつたつけ……？」

うんうんと唸つて思い出そうとするけれど、まつたく思い出せない。いつたい、私はどうして涙を流しているのか。夢が原因のような気がするけれど、その夢の内容が思い出せない。

でもなぜだろうか。とつても楽しくて、とつても満たされていて。そして温かい。

「今なら、きつと……」

ゆっくりと起き上がる。ずっと迷っていたことがあつた。どうやつて人と接していくことが正しいのか、どうやつたら他人へ常に見返りを提供し続けられるのか。

こんなこと、考えなくてよかつた。別によかつたんだ。

私は一步、前へと踏み出した。それはただ起こつた事実のみを見れば、ただ小さな寝室で歩いただけ。けれど私にとつてそれはずっと迷い続けた一步で、そしてようやく踏み出すことができた一步だ。

ずっと止まっていた私の中の歯車が回り始めた。逃避のための停滞から、進むために。

動かしていかなかつた歯車はなかなかスムーズに動いてくれない。それでも動いてくれた。だから私は進むことができる。どこでもらつたのかわからない、この温かさを信

じられるから。

——元気で、上手くやれよ

それは聞き覚えがあるような、ないような空耳だった。
思い出すことはない、愛の夢。